

【努力賞】—海外の大学生



見習いたい「時間を守る」国

パウベククズ・ジャンサヤ

(カザフスタン。カザフ国立大学・女・二十三歳)

私が「日本」に出逢ったのは七年前です。この出逢いは人気アニメである「ナルト」のおかげです。

当時十六歳だった自分には関心のあることも、趣味も、夢もなかったのです。そんな私が「ナルト」から次々に色々な日本のアニメに興味を持ち始めました。アニメだけじゃなくて、日本の音楽を聴いたり、文学を読んだり、映画やドラマを観たりするようになって、いつの間にか「日本」は、私の人生の中のかげがえのない存在になっていました。

こうして、「日本に行く」という夢を描いた私は、自国のカザフ国立大学の日本語学科に入学し、夢に向かって毎日、日本語の勉強を楽しんでいました。

そして、ずっと持ち続けていた夢が日本語を学び始めてから五年目で叶いました。夢であった日本の筑波大学に留学に行き、好きな日本での生活を楽しんで、日本人の友達を作って、日本と日本の社会のことを段々と深く知るようになりました。

一年にわたった日本での生活は、私に沢山の経験を与え、沢山のことを考えさせてくれました。日本人の友達もできて、色々なことを教えてもらったり、助けてもらったりしてお世話になりました。私が出会った日本人は、みんな優しく、良い人ばかりでした。

そんな日本人に「私も見習わなきゃ！」と思ったことが沢山ありました。

一番印象に残ったのは、日本人の「時間を厳しく守る」性格です。

これには、時間を守らずに遅刻をしたら、自分が困るというだけでなく、「相手を手たせては申し訳ない」という思いやりの心が、日本人にはあるからです。この「自分よりまずは他人のことを考える」、「周りに迷惑をかけない」「申し訳ない」という日本人の性格にすごく惹かれました。

私は日本人の友達に待たされたことが一度もないです。最初の頃は、私はよく遅刻していたけど、友達に見習って、できるだけ時間を守り、遅刻はしないように頑張りました。

こうして、私も「時間を守る」ことを大切にできるようになったのです。

日本人に見習わなければならないことが数多くあるので、これからも、「日本」のことをもっと知って、日本人のいい面を身に着けるために頑張りたいと思います。



「父権社会」の国

インイン・ウ

(オーストラリア。ニューサウスウェールズ大学・女・十九歳)

日本は、「現代的な世界」と「伝統的な世界」に会える国です。ロボットが歌を歌ったり、テレビがついているお風呂があったり、どこでもハイテクなものが見られます。一方で、着物を着ている人、生け花、歌舞伎など、伝統的な面も見ることができます。そして、「日本」という国について、普通の答えは、「原宿がおしゃれだ」とか、「桜がきれい」などです。でも、私にとって、「日本」はたくさん素敵な文化がある一方、まだ封建的な「父権社会」の国、だと思っています。

最近、日本が男社会である事について興味を持つようになりました。男社会とは、男性が様々なことにおいて女性よりも力を持っている社会のことです。日本の女性に対する差別が目まぐるしく注目を浴びています。注目しなければならぬのは、日本が技術的に発展した国であるのに、なぜ、そうした「差別」の問題があるのか、ということなのです。

日本の男社会は、出生率の低下を招いてきたと思います。なぜなら、産休や育休などの女性の職場環境が悪化しているからです。

日本社会には、女性が家庭を持った際に退職をのぞむ傾向があります。女性は仕事と出産を両立できないから、退職せざるを得ないと言われています。キャリアとして成功して夢を叶えてから、結婚して主婦になろうと思っている女性が多いようです。また、日本人女性の年収は、出産後は少なくなるため、キャリアを築きたい女性は、結婚をためらってしまいます。

職場ではマタハラも起きます。マタハラというのは働く女性が妊娠すると退職を迫られる事です。マタハラを経験した女性は妊娠が罪であるかのように感じ、妊娠をしなければよかったとすら感じることがあります。

日本の社会では、男性は一家の稼ぎ手であり、女性は家と子供を守る人として認識されているようです。ドキュメンタリーを見たことがあります、ある男性が「妻は家において子供達を世話する事になっています。それは日本の伝統です」と話していました。子供のことは全部女性の仕事になっているので、プレッシャーになって仕事をやめなければならない女性が多いと言われています。残念なことは、女性は職場でその能力がなかなか認められないということなのです。

日本は豊かで、文化もとても素敵な国ですが、日本人の女性にとって、もっと「男女平等の国」になるべきではないでしょうか。女性のさらなる社会参加を促すために、女の人も社会で力を発揮することができるとを、みんなが理解するべきだと思います。



「現代と伝統」が調和した国

畢 玉婷

(中国。遼寧師範大学・女・二十歳)

「日本」という国は「現代的」だけけれど、「伝統をしっかりと守っている国」だと思えます。私は日本語を学習して、日本と日本人への認識が大きく変わりました。

日本語を勉強する前の私は、中国の歴史ドラマの悪い日本の印象と、日本のおもしろいアニメを見て、日本はなんて「矛盾だらけの国」だろうか、と感じていました。日本語を勉強するにつれて、日本の雑誌やネットの記事を読むことができるようになりました。そして、日本文化への理解が広がりました。「茶道」、「囲碁」、「着物」、「盆栽」、「日本庭園」など沢山の伝統的な文化を知りました。

私は、このような伝統的な日本文化は、現代の日本人若者のファッションや生活スタイルと強いつながりがあると感じました。そして、ますます日本文化に興味を持つようになりました。

私の想像の中の日本人はこうでした。恥ずかしがり屋で、地味で、目立つのが苦手です。個性のない同じようなスーツのファッションや生活スタイルをしています。でも、実際に行って見たら、全然、違っていました。

昨年、私は憧れていた日本へ旅行に行きました。大喜びの私は、日本の町で一人の男性の姿を見てびっくりしました。私が想像していた日本の男性のイメージは一八〇度変わってしまいました。その男性は髪の毛を染めていました。それも茶髪だけでなく色とりどりに染めて、耳にピアスをつけていたのです。耳だけではありません。鼻や唇にまでに穴をあけてピアスをつけています。もちろん、一人だけでしたが、あまりにも個性的で、驚きました。

しかし、その個性的な男性も含めて日本人は、交通信号や交通ルールなどの社会ルールをきちんと守っています。また、ゴミを分別して捨てるルールを守ります。エスカレーターも左に並んで立って右側にスペースを空けます。ルールを守ることが大人から子供まで当り前のことになっています。

日本は、先進的な文化を吸収している現代的な一面もありますが、実は伝統をきちんと守っている国です。それは、日本人の家庭や生活スタイルを見ると分かります。例えば、日本人の家には「洋室」と「和室」が両方あるそうです。そして、祭りの時には、若い人でも伝統的な服を着て、伝統的な形式で祭りに参加します。

自分の目でみた「日本」は、「現代と伝統が調和した国」でした。



「金継ぎ」の芸術

マリア・カメリア・ニッツア

(ルーマニア。バベシユ・ボリアル大学・女・二十歳)

「心の傷」という比喩は、私たちが人生を語る上で使われ、すべての人にかかわるものです。日本の伝統技術の中には、壊れた碗や器などを金で修繕する「金継ぎ」という技術があります。私は高校生の時、インターネットで、日本の「金継ぎ」のことを知り、とても興味を持ちました。そして、大学で日本語を学んで、より深く金継ぎという芸術を理解できるようにになりました。日本人の魂は、その「金継ぎ」の芸術における美しさと明瞭さの比喩の中心に見とれます。

「金継ぎ」の芸術は真の日本の精神における本質を表していると思います。日本人の魂と「金継ぎ」の繋がりは、「永遠に続くことはなく、終わることもなく、完全でもない」という禅の三つの道義に基づき、わび・さびの概念にもつながっています。傷を隠そうとするのではなく、修繕した後を目立たせるのです。全ての人が時の変遷を感じるのは、器が欠けたり割れたりして、壊れてしまうのと同じです。

「金継ぎ」の本質的価値の一つは協調性であり、その協調性は、一つの作品を生み出すいくつかの手、すなわち独特な個性を維持したそれぞれの作者の存在からも見てとれます。例えば、碗において、金色の継ぎ目によって強調された修復方法の見事な繊細さを通して、私たちは元々の陶磁器職人とニス塗り職人という二人の芸術家の手仕事を見出すことができます。修繕された陶器は、同時に破裂感と時代を超える連続性を伝えます。金継ぎの芸術と人々の経験は互いに関係し合っていると私は思います。

壊れる前の脆弱性と、壊れた後の強さという二つの表現があります。人生が終わり、亀裂は人生において人が通らなければならない曲がりくねった道のようなものです。修理された陶器は我々にその教訓と美しさを教えてくれます。

私たちは、少なくとも人生に一度は敗北を経験しているか、これから経験するのです。それは避けられないものなのです。碗や湯呑みのように、私たちは自身のこぶや擦り傷に耐え抜きます。幸運にも過去は常に改善し得ます。これらの内面的な亀裂を恩恵に変える方法があります。私たちの中に隠されている光は、私たちの心と感情を溢れ出させるために解き放たれるべきなのです。私たちの世界を変える最大の力は、何がベールに隠されているかを見極める力にあります。私たちはたとえ暗闇に囲まれていたとしても、しっかりと光の中に見えるさえすれば、暗闇は消え去ります。その時に、私たちは癒す力を得て癒されます。私たちは新たな方法で考え、違った角度で心の傷を見るのです。

【努力賞】—海外の大学生

食事から感じた「もつたいたいない」

丁力

(中国・蘇州科技大学・男・二十歳)



よく学食で、日本人留学生のKさんと話をしながらご飯を食べました。時々、食後の僕らの食器が目に入ってくるがありました。Kさんのは、いつもご飯粒一つ残らずきれいなのに対して、ぼくのはいつも食べ残しがあります。Kさんはえらいなあ、と感心はしたが、周りにぼくのような人が多くいたから、最初はこのことを何とも思いませんでした。

今年の二月、中国人大学生の代表として金沢に招かれて現地の日本人大学生Tさんと数日間ともにしました。ある日の昼食時、注文を間違えた私たちの前に運ばれてきたのは想像とは違うものでした。サラダ嫌いのぼくらのセットにはサラダがたくさんのもつた。ぼくはもちろん、Tさんもそのポリウムを見て難色を示しました。まあ、残せばいいのではと思いい、ぼくはいつもと同じように嫌いなサラダを残しました。しかし、目をTさんにやると、いつの間にか、彼はサラダをきれいに平らげました。「すごいね」と感心したぼくに対して、彼は「だって、食べないのもつたいたいでしょ」と静かに言いました。

まずい料理が食べないのが当たり前ではないか、と考えていたぼくはその時、心の中で何かが崩れかけたように覚えました。帰国後、ぼくは世界の食品浪費問題について少し調べてみました。FAOによると、世界では年間でムダになる食糧は約十三億トン、人が食べるために作られる食料の約三〇%にもなるそうです。一方、世界では八億人を超える人々が飢饉に苦しんでいます。

このデータを見たぼくは衝撃を覚えました。食糧に感謝の気持ちを持たなかったぼくは、「もつたいたいない」ということばを理解できませんでした。好きなものは食べるが、嫌いなものは捨てる生活をしてきました。そして、そういう「もつたいたいないこと」をしているのはぼくに限らず、大勢います。嬉しいことに、中国でも日本でも、KさんやTさんのように、食糧に感謝の気持ちを抱き、大事に思う方が増えてきました。ぼくもそういう人になりたいです。そして、食べ物を浪費する前に、もう一度そのありがたさと、「もつたいたいない」という言葉を思い出すように呼びかけたいと思っています。

【努力賞】—海外の大学生

アニメは「幅広いテーマ」と「心遣い」

楊 丹

(中国。湖北民族学院・女・二十一歳)



「日本語を勉強するきっかけは何ですか」とよく聞かれます。私はいつも「アニメ」と答えます。今、中国では二十代前後で日本語を習いたい人は「アニメ」がきっかけの人が多いです。

日本はアニメ強国です。世界の人々を引き付ける理由の一つは作品の「幅広いテーマ」と「心遣い」だと思います。日本のアニメは、すごい想像力に加えて、日本の特色がきちんと守られています。特に、日本人の繊細な感情の描写は、日本のアニメの特技です。友情、恋、夢、執念など、「名前を付けられない」あらゆる感情が作者の手で私たちの心に染み込んできます。そのため、青春時代の私たちが素晴らしい歳月を過ごすことができるのです。

アニメは私に日本について最初の印象を与えました。綺麗な町風景、祝日に賑やかな屋台と花火、可愛い女の子、優しいお隣さん、放課後の多種多様な部活、それから「中二病」の気配、、、。しかし、それらは日本の本当の姿とは限りません。昨年十月、機会があって、一週間ほど、日本へ行きました。

少なくとも「中二病」の気配は、想像のように感じられません。私と出会った人々は皆優しく穏やかでした。私に気配りして、何気ない行為かもしれませんが、自分がちゃんと扱われている感じでした。こういう気配りは日本人の習慣ですから、日本社会の厳しさがほんのちよつと分かりました。気配りの習慣は、相手にとっていいことですが、自分は知らないうちにストレスになってしまっています。

周知のように日本人は仕事にこだわる癖があって、それが更に生活のプレッシャーを覚えるようになるはずです。日本の社会の辛さをつくづく感じた日本人は、ストレス解消の方法を探そうと決心して、アニメに目を向けたのではないのでしょうか。

日本のアニメに溢れる「中二病」の気配、キャラクターの大きな仕草など、全部楽しむためのものでしょう。一瞬だけでもいいから、昼間の仕事の陰鬱な気分を追い払いたいのです。アニメを發展させた「日本人の精神」を十分に理解しました。

アニメだけではなくテレビ番組、ドラマも、それぞれの方法で、生活に追われている日本人の仲間を励ましています。日本社会は厳しいことは厳しいですが、どこまでも「心遣い」が溢れています。



「秩序」観あふれる国

胡彦峰

(中国。黒龍江大学・女・二十五歳)

私は、最近、国際交流研究所がネットで発信した「デジタル版・日本語教材【『日本』という国】」という教材を読んで、「日本」という国について、改めて考えてみた。

一番感心し、印象的だったのは、日本人が「秩序を守る」ということだ。

日本は「地震多発国」と呼ばれるように、地震や火災などの災害が多い。しかし、日本人の「秩序」観は、大きな災害の時でも、変わらずに発揮されている。二〇一一年（平成二十三年）三月、東北沖を震源とする「東日本大震災」が起こり、日本周辺での観測史上最大の地震が発生した。「大津波」も発生し、福島を中心に「原発事故」に見舞われた。その時、東北三県では、約四十万戸の建物が全半壊し、数十万人が生活と仕事の基盤を失った。特に、「原発事故」は想像をはるかに超えた放射能の恐怖という大きな爪痕を残した。

しかし、日本は国民に対して、十分な防災教育や、地震と火災などの避難訓練を行ってきたので、大災害に襲われても、住民は整然と行動し、可能な限り二次災害を防いだ。

また、東日本大震災に関するドキュメントを見たが、二つのことが印象に残っている。一つは大地震が発生した後、何百人が広場に避難し、その中でタバコを吸うのは一人もいなかったらしい、三時間後、人々が去っても、地上にはゴミが一つもなかった。もう一つは、被災地のある交差点で、信号が地震で壊れて動かなかったが、車両の混乱はなく、交通の秩序は守られていた。

普段の生活の中でも、日本人が「秩序」を守る場面がよく見られる。人々は整然と並び、ゴミの種類は厳しく分けられ、エスカレーターでは左側に立ち、右を通行し（関西地方では逆）。雨の時、人々は駅に入る前に周りに迷惑をかけないように、早めに傘を閉じる。細かいことでも日本人は「秩序」を守る。日本人の「秩序」観は、「日本語教材【『日本』という国】」の『第八章・日本人の行動様式』にも書いてあるように、日本人が長い歴史の中で、「序列社会」、「タテ社会」を生き、「集団志向」を強め、「和」を重んじる精神を形成してきたからだ。「秩序」観が、日本人の普段の生活習慣となっている。

一方、中国では、道を渡る時に信号を無視したり、観光地に落書きしたり、規則を守らないことがまだまだ多い。日本人の「秩序」観を学んで、ルールを守る面で改善すべきところが多い、と思う。

【努力賞】—海外の大学生



「職人氣質」の国

胡 琴

(中国。北京第二外国语学院大学院・女・二十三歳)

もう五年も前のことですが、大学に入る前、日本のことを全然分からなかった私は、ネットで『二郎は鮭の夢を見る』という映画を観て、「職人」の存在を知りました。「すきやばし次郎」の店主・小野次郎の仕事ぶりを描いた作品です。芸術品のようなお寿司がお皿に並んで、宝石のようにキラキラ輝き、人の食欲を誘います。私は「ああ、やはりお寿司は最高」と思いました。

もっと感動したのは『二郎さん』の話でした。

「この仕事を嫌だななんて思った事は一度もない、ただこれに惚れて惚れて一生懸命やって、少しでも上、少しでも上と考えて、八十五歳になっても、やめる気はない」、「もっと美味しい寿司がつかれないかと二十四時間考えている」と話していました。

寿司職人だけではなく、日本には、時計職人とか醤油職人とかたくさんいます。なぜ日本は多くの職人を輩出するのでしょうか？私は「初心を忘れないからだ」と思います。職人にとって、自分の仕事を一生の仕事だと思つて、いつも前を見て、完璧を目指すのが「初心」なのでしょう。しかし、それは決して容易なことではありません。

時代の変化は激しいので、時代の流れに流されていく人のほうがずっと多いです。変えたほうがいいものと、変えないほうがいいものを自分で判断しなければなりません。そして、求めるものを決めて、初志貫徹する人こそ職人です。世界がどんなに騒いでも、「職人」の心はまるで湖のように静かで、穏やかなまま、ただ目の前の仕事に集中し、ベストを尽くしています。

「職人」だけではなく、日本の企業経営もそうです。「経営者は、完全性を追求することを、日々の習慣としなければならぬ」と京セラ創業者の稲盛和夫さんは言いました。日本の職人は「きつ」といいものを作ってくれる」と信頼されています。中国の若者は日本の商品に対して信頼し、日本の商品なら安心して使えると思つています。中国で「独身の日」の昨年十一月十一日にアリババのダブル部門売上高一位になったのも日本の商品でした。近年話題の「爆買い」もそれを裏付けています。

質へのこだわり、仕事への情熱、自分への厳しさ……私は日本人のこの精神力にひかれました。同じ商品ですが、残念なことにメイドインチャイナはいまいち足りないとこが多いので、私は、中国は日本の「職人氣質」を学ぶべきだと思います。

【努力賞】—海外の大学生



私の心に重要な「日本文学」

林 兆敏

(中国。広州城市職業学院。男。二十一歳)

文学とは、人間の心にとつての「食べ物」に相当していると思います。

日本は世界文学の一つの重要な地位を占めています。文学は、社会と人間の状態を絵のように写真しました。日本文学は、私の心の一番重要な部分です。

日本文学の歴史は長いです。例えば奈良時代まで遡ると。中国の漢字が日本へ伝播していましたが、日本書紀があります。万葉集は、この日本の古い歌を集めて、和歌を発展させていきます。

平安時代の源氏物語は「愛情の物語」です。

文学思想が形成されるまで、長い時間がかかりました。源氏物語から今まで、人の愛情生活は日本文学でもとても重要な要素です。

日本近代文学は多様化しています。

情感小説、私小説、などですが、今私が、大好きな作家は「村上春樹」と「湊かなえ」です。湊かなえの「Nのために」で、大いにショックを受けました。それは、人々は罪があるというところです。村上春樹の小説は平易な言葉使いです。『風の歌を聴け』『ノルウェイの森』『世界の終わり』とハードボイルド・ワンダーランド』などの中で、私が一番好きなのは『走ることについて語るときに僕の語ること』です。ジョギングのとき、村上先生の『私は人じゃない、私は機械です』を思った時の私は、走る！走る！と思います。ロボットみたいです。

日本文学に私はたくさん精神的に援助してもらいました。

だから日本の文学を研究したいです。

以上が、私の「日本はどんな国だと思います」かの答えです。

【努力賞】—海外の大学生



日本人の「サービス精神」

陳 羽萌

(中国。大連海事大学・女・二十一歳)

前は、「日本」で思い出すのはアニメだったが、日本語を学んで、日本のことを理解し始めたなら、「日本」と言えば、日本人の「サービス意識」の高さを思い出す。

去年、初めて日本に行った。グループでの日本旅行だったので、少し慌ただしい旅行を体験した。その時、コンビニで、買いたいものが見つからなかったので、店員さんに聞いたら、親切に案内してくださった。その親切な心に触れて、私は初めて日本人の「サービス精神」を感じた。その時、「なぜ、日本人はそのサービス意識を持っているのだろうか」、「そのサービス精神は、どうして生まれたのだろうか」と、いろいろ考えた。

今年、また日本に行って、その「サービス精神」を、一層強く感じた。

一つ目は、日本人の「サービス精神」は、全てのお客さんに対して平等に提供されていることだ。例えば、日本である店に入り、何かを買ったら、店を出る時に店員さんは笑顔で「ありがとうございます」と言ってくれる。その笑顔が私を真っ直ぐ見ていたので、少し照れくさかったが、その笑顔は、誰に対しても平等であることが分かった。

二つ目は、日本人の「サービス」は細やかで、親切であるということだ。お客さんが何を必要としているかを、一緒に考えてくれる。例えば、日本では店員さんがお客さんの傘を預かり、きれいに拭いてくれたり、傘を収納するナイロン製の袋をくれたりする。こうしたサービスは、お客さんにとって、ありがたく、便利であるだけでなく、店内を汚さないというメリットもある。

三つ目は、日本の店員さんは仕事の時とても真面目だ。買い物した時に、買ったものをきれいに包んでくれるだけでなく、必ず店の外まで客を見送ってくれる。

日本人の「サービス精神」は、自発的、積極的に心から他人を思って行動することができる。素晴らしい。心のこもったサービスを与えることで、両方が幸せを感じることができる。

その「サービス精神」が形成された理由は二つあると思う。一つは、日本は「礼儀を重んじる国」であり、もう一つは、「教育の結晶」だと思う。学校では体験型の「サービス」についての教育を重視する。このような日本人の「サービス精神」を、多くの国の人たちが、学んでほしい。

【努力賞】—海外の大学生



「良い心」がある「大福」みたい！

ササナンチュンキリー

(タイ。ラムカムヘン大学・女・十八歳)

日本と言えば、大体のタイ人は良い事ばかり思い出します。例えば、料理は美味しいし、自然が美しく、コスプレやファッションアイテムで誰でもなりたい自分になれます。皆は、世界一行きたい国だと言います。私は、「日・タイ青少年国際交流事業」で、二〇一五年十月に十日間、福岡県へ行きました。本当に貴重な経験でした。

私にとって、日本は「不思議な国」です。日本人はいつも優しく、困ってる人に手伝ってあげます。丁寧で何でもできるようです。もし、出来ない時は、一所懸命頑張って、成功させようとします。私は日本人のここに感動しました。本当に美しく、パーフェクトな国でしょう。ただ、同時に、日本は「怖い国」だと思います。

私が「日本は不思議な国」だと思うのは、「頭と心の中の気持ち」のことです。どうして、そんなにパーフェクトで、ばっちり完全な国なのに、社会問題があるのでしょうか。日本人はストレスを持ち、内向的になって、他人をいじめたり、怪我や病気をしたりして、あやめる人もあやめられる人も相談する人がいません。だから、どんどんストレスが増えて、他人を殺したり、自殺をしてしまうのではないのでしょうか。日本は、本当にパーフェクトな国だと思いますが、すばらしい所もあれば、本当によくない所もあります。どんなに最高でも、良い所もあれば、悪い所もあります。

私は、もしかして、このパーフェクトは厳密すぎるからではないかと考え続けました。

日本では、同じクラスなのに友達とは言えない関係もありますね。私は日本人が考えすぎるし、遠慮しすぎですから、他人が手伝ってくれる事も気持ちが悪く思うのではないのでしょうか。多分、ずっと悪い事ばかりだったから心が痛くなって、伝えたい事が伝えられなくなって、暗い人になるのではないのでしょうか。タイと比べたら、タイ人はそんなに考えすぎないですよ。私達は名前を知っていれば、それはもう友達です。それにタイ人はよく笑っています。だから、タイ人は早く友達になれます。

日本人は「大福」みたいだと思います。複雑でわかりにくいですが、中には「良い心」がありますよね。

そして、私が感じた事を感じて、世界にいる皆さんにも日本の事をもっと知ってほしいです。なぜなら考える事と本物は全然違います。「百聞は一見に如かず」ということわざがあります。あなたはびっくりするかもしれないですよ。考えが違ってても、日本の事を嫌いにならないでください。日本は魅力がいっぱいです。日本は、あなたが知ってるよりずっと美しく、これからもずっと美しいです。



日本の自然は「四つの色」

ボルトネーブスカヤ・ユーリヤ

(ロシア。イルクーツク国立大学・女・二十歳)

日本というと、きれいな桜を思い浮かべる人もいれば、素敵な着物姿の芸者を思い浮かべる人もいるでしょう。私は、ピンク、緑、赤、それと白、様々な色が浮かんできます。どうしてでしょうか。

日本のアニメーション映画にあるように、『一秒5センチメートル』のスピードで桜の花が落ちるのはやつと春が来たということ。外に出かければ、負担になっていて問題を忘れられるようになって、あっちこちでにこにこ笑ったり、子供のように遊んだりしている人が見られます。風とも呼べないほどかすかな空気の流れを感じたり、桜が落ちてくる飛び上がっているのを眺めたりして、気づいてみると自分がピンクの霞に立ち込められて立っているのです。ピンクの日本。

埠頭のちかくのどこかで子供の気軽な笑い声や海の音が聞こえると、夏がぼちぼち近づいているということ。緑の日本というエメラルドの王国に取り囲まれて、心地よくさせてもらえるのです。そのとき、緑の風船を持って気持ちよさそうに見える子供だったり、抹茶のアイスクリームだったり、今まで見ていたはずなのになかなか見ていなかったことに気づき、敏感になっている自分に驚きます。

そのあと、風が段々冷たくなっていった、のんきな愉悦からちよとした憂鬱まで移ってきて、緑の日本の変わりに、赤の日本が現れてくるのです。まるで画家のしなやかな手の仕事のように、木が一気に真っ赤になってきます。自然が眠りにつくために、真っ赤な葉っぱがひらひらと肩に落ちてきて、それは全部におろおろしながら「さよなら」と言っている女の子のように見えます。

時間がたつと、水が氷になって、世界が白紙のように見えるでしょう。それは白の日本がノックしているということ。冷たいゆびさきを暖めようもしない白の日本が雪の匂いに纏って、目を閉じて笑っているのです。空気がカチンカチンとかじかんで、木が氷花のように澄んで、何もかもが白色の風景の中に閉じ込められています。全てを閉じ込めた白紙は、あなたが後悔していることをやり直せる可能性があります。雪がさらさらと落ちている間に、もう一回やり直してみませんか。

人によって季節が連想させる色は様々です。私なら、ピンク、緑、赤、白になるのです。時々、ピンクの日本にたまらなく安心させてもらいたくなります。たまに白の日本に落ちてかせてもらいたいのです。あなたが「日本」から連想するのはどんな色なのでしょうか。



社会責任の種をまく「成人式」

紀元

(中国。東華大学・男・二十一歳)

「明けましておめでとう！今年のはたちだね。大人だよ！」

年が明けると、日本の子供は一生に一度の重要なイベントを迎えます。以前の私はこのイベントが理解できませんでした。メディアで成人式のニュースを見て、ただ二十歳の若者達が集まり、きれいな服を着て、成人したことを祝う伝統的な行事だと思っていました。

なぜ、日本人はこれほど成人式を重視するのでしょうか。

デジタル版の教材・『日本』という国』を読んで、私は成人式を再認識しました。成人式はもともと伝統行事でしたが、今の成人式は「成人としての自覚を持たせるイベント」に変わりました。大人になれば、社会人としての責任は避けられません。二十歳という区切りは、かつては選挙権の象徴でもありました。今年の成人式で麻生太郎副総理が話した「これまでにはパクられても少年Aで済んだが、二十歳からは必ず名前が出る」という冗談の中に、新成人の重い責任と義務が込められています。

日本の若者は、ゆとり世代と言われて、社会に出ても大人らしくありません。今の中国も同じ問題に直面しています。中国で成人になる年齢は十八歳です。しかし、成人式のような公式のイベントや儀式はありません。それ故、若者達は「自分はもう大人だ」という意識が薄いです。若者達はいつまでも子供っぽい考え方のままで、社会責任を負うという意識も欠如していて、「でかい赤ちゃん」と言われています。また、「ニート」「ドラ息子」などのような社会問題も起こっています。

大人らしくない若者が増えているようです。今年、私の大学では人民代表選挙が行われました。私にとって初めての経験だったので、大変重視しましたが、欠席したり、投票権を放棄したりする学生が七%に達しました。これは自分の社会責任と政治権利を軽視していることの現れでしょう。もし、成人式で、成人したばかりの人々に社会責任を教えれば、こんな幼稚なことが起こらないかもしれません。

「成人式」は必要だと思います。日本は伝統的行事で、責任感を心に刻ませ、素晴らしい国だと思います。成人式の後、お酒を飲んだり、タバコのゴミが地面に散らかっている会場もあるそうです。成人になった心構えを、一つのイベントで終わらせてはなりません。

成人になった一人一人が、社会に責任を負うという意識を忘れてはなりません。

創造力を刺激！「日本の芸術」

シエフチエンコ・ヴァレリヤ

ウクライナ。キエフ国立言語大学・女・二十四歳



芸術が人間に与える影響は、ひとりひとり違うと思いますが、私の場合、「日本の芸術」が私の創造力を刺激してくれました。例えば、日本の絵を見ると、「私も絵を画きたい」と思い、日本の音楽を聴くと、「私も自分で演奏したい」と思いました。

私が「日本の芸術」と出会ったのは子供の時です。ある日、家の中でかわいい絵がいっぱいある日本の童話の本を見付けました。お祖母さんからの一歳の誕生日プレゼントでした。もしかしたら、お祖母さんは私の芸術への情熱を予感していたのかもしれませんが。

高校生のとき、キエフ市内の展覧会で写真家の山内悠さんの写真を見ました。美しくて華麗な景色を撮影したものでした。特に「驚天動地 天」と「目映い太陽」という二枚の写真に感動しました。展覧会の後、外に出たとき、アスファルトの地面から空に視線を向け私は、毎日の忙しさで、時々「自然の美しさ」を感じることを忘れてしまっていることに気がつきました。その日から、私は変わっていく空と夕陽を撮影するようになりました。

大学一年生のとき、イラストレーターの「カガヤ」という人の絵に出会いました。この絵は私に強い印象を与えました。日々のわずらわしさを忘れるために、果てしない星空と海を見たくまりました。壮大な自然のなかで、ゆつくりと休みたいと思いました。そして、休んだ後で、自然の中で心も身体もいやされて元氣よく毎日を通すことができると思いました。

二年生のとき、キエフ市で、ピアニストの中村天平さんのコンサートへ行きました。驚異的な演奏でした。心がおだやかになって、感動して、「私も自分で演奏したい」と思いました。そのあとで、信じられないことが起こりました。コンサートの後、私は心も身体もとても元氣になりました。そして、寮に帰って、さっそく自分でピアノを演奏してみました。

私は「日本の芸術」と親しくなつてから、日本語を習得したいと思いました。他の民族の芸術を、本当に理解するために、言語と文化を学ばなければならないと思ったからです。

その上、「日本の芸術」は私たちにいろいろなことを教えてくれます。例えば、私たちが忘れてしまっているかもしれない「自然の美しさ」に気づかせてくれました。それに、私たちの創造力を刺激して、自分の心と感情を表現する方法を教えてくださいました。「日本の芸術」は、私の創造力を刺激する力を持っています。



「伝統文化の忠実な守護者」

呂芸雅

(中国。西北大学・女・二十一歳)

「日本はどんな国だと思いますか」という質問をされれば、驚き無し、みんなの答えは、大体「経済が高度発達」、「環境が非常に良い」、「森林が多い」などである。

確かに、これらの特徴は日本を代表できるが、私にとって、日本について最も印象深いのは「伝統文化の忠実な守護者」としての日本だ。

三味線は日本の伝統文化の代表的なものの一つである。大学入学後、日本語を学ぶ機会を得ることができ、五十音図と自己紹介以外、最初に学んだのは三味線についての文章であった。あの時、ただ「三味線？たぶん中国の二胡と同じ古くさい、つまらない楽器だろう」という考えを持って、全然理解する興味もなかった。数カ月前、友達の勧めたミュージックを聴いて、意外に三味線のが好きになった。びっくりさせられたのは、その『時の旅人』と命名された曲は、味気ないどころか、逆に、美しかった。この曲は、上妻宏光先生が三味線とピアノを使って創作した、現代和風の音楽である。この曲を聴いて、自分が一つの精霊になり、百年の歴史を通り抜け、和服を着て、お茶を飲みながら、ゆっくりして森林と海を眺めて、世の中の賑やかさと物寂しさを見尽くすというような感じがした。本当に素晴らしい、と感じた。

その後、私は上妻宏光先生の他の作品を聴いて、彼のスタイルに似た音楽家吉田兄弟の作品も聴いてみた。彼らは古風な三味線をロック、ラテン音楽、ブルースなど流行的な元素と結合して、時々ジャズアドリブも入れて、三味線音楽をもっと軽快にさせた。私は、これが「伝統文化に対する本当の守護」——保護だけでなく、革新と発展であると受け取った。

一方で、中国の伝統的な楽器「二胡」は深刻な状況に陥っている。悠久な歴史があっても、現代の音楽元素とよく融合できなかつたら、二胡の運命はどうなるのだろうか、と心配だ。

伝統文化の守護は国民全体の責任だ。日本国民の三味線に対する継承と発展は、日本国の伝統文化に対する態度の集中表現だ。文化は民族精神を表し、歴史は現代を豊富にしてくれるが、この点から見れば、日本は本当に可愛い国で、私は大好きだ！

【努力賞】—海外の大学生



「性格と心」を育ててくれた

アイサク・オデン

(スウエーデン・ヨーテブリ大学・男・二十歳)

「日本」—ただその言葉を考えたら、夢を見ているような気持ちになります。

高校に入学した時に私は将来のことや仕事について全然考えませんでした。でも、日本人の友達が「日本語を勉強して！」と言ったから、私は高校で、「日本語の授業」に参加してみました。そして、私は一年間、日本に行つて、「私の将来」を見つけました。

二〇一四年六月に初めて日本に行った時に、私はたった一年間ですが、いろいろな経験をしました。福岡・大牟田市でホームステイしました。初めての国に行つて、知らない家族と一緒に住むことになりました。

日本語を高校で勉強しただけでしたし、ホストファミリーは、英語は全然ダメでしたので、あまり話が出来ませんでした。でも、大きな問題はありませんでした。私とホストファミリーは言葉を使わずに楽しんでいました。そこのお父さんは、私に将棋を教えてくださいました。とても感謝しています。

「日本」という国について、最初は正直ちょっと怖い感じでした。

でも、私が日本で見た景色は全然怖くありませんでした。私が見ましたのはどこでも「日本人の優しさ」でした。

私が日本で困ったとき、知らない人でも、私の問題事について、私を助けてくれました。

例えば、道に迷っていた時に、何かを読めない漢字があった時に、出会った日本人は、私と一緒に正しい道に連れて行ってくれましたし、私に読めない漢字を読んでもくれましたし。

日本は、青年の私に「性格と心」を育ててくれた国です。

日本は、私の過去、今、と将来に関わっている国・日本に感謝しか持っていません。

私は「通訳者になりたい」と思っています。

「日本」、有難うございます。



「ご当地ゆるキャラ」は日本の「文化」

陳 佳旻

(台湾。輔仁大学・女・二十二歳)

日本という国は、世界一可愛い『公務員』がいる国だ。『公務員』とは、日本・四十七都道府県の各地にあるマスコットキャラクター“ご当地ゆるキャラ”のことだ。

各都市を宣伝する使命を担った「ご当地ゆるキャラ」は、地域を活性化させようという発想がまず、とても「クール」だと思う。愛らしい見た目と独特の動きを持つ「ゆるキャラ」は、老若男女を問わず、また言葉が通じない外国人にも受け入れられやすく、日本の魅力をより広く発信している。

実際、日本国内でブームになっているし、SNSを通じて世界的にも認知され、日本語が分からなくても、「くまモン」、「ふなっしー」、「ひこにゃん」などの「ご当地ゆるキャラ」がとても人気で、経済的効果も小さくない。だが、それよりも「目に見えない効果」が大きいと思う。例えば、全国の県民の地元愛が深まったり、今まであまり詳しくなかった他県を好きになったりするきっかけになる。無形の効果も含めて、日本の「ゆるキャラ戦略」は大成功だと思う。

しかし、「ゆるキャラ」の評判について調べてみると、近年では「ゆるキャラが多すぎる」、「税金の無駄遣いだ」と批判する声も出ていることがわかった。ニュースによると、日本には、企業キャラクターを含めて一五〇〇体以上の「ゆるキャラ」があると言われているが、それらの年間稼働日数は平均で僅か二十日ぐらいとのことだ。すつかり「ゆるキャラ」にはまっていた私は、一瞬目を疑ってしまった。あまり活躍の場がない、というのだ。確かに多すぎるかもしれないが、十分に活用されていないのは悲しいことだ。せつかく「地域おこし」という立派な目的を担って生まれてきたのに残念なことだ。

「ご当地ゆるキャラ」にはメリットが沢山ある。日本のように、地方自治体がそれを募集したり、公認したりする国は他にないと思う。よく日本を代表する文化として挙げられる茶道や剣道などの他に、「ご当地ゆるキャラ」も、日本を代表する一つの文化であるように外国人の目には映る。これからも、それらの可愛い『公務員』たちが末永く活躍してくれることを願うばかりだ。

二〇一六年にJALの招待で三週間日本に行った時、「ゆるキャラ」を見ることはできなかったので、「ゆるキャラに直接お会いするため」に、また日本へ行きたいです。



暗い「日本のいじめ」

郝 文文

(中国。河南科技大学・女・二十一歳)

子どもは国家の希望と未来です。彼らの性格と振る舞いが将来の国家の政治、経済、社会に大きな影響を与えます。しかしながら、いま日本では「いじめ問題」が深刻化しています。いじめと孤立には子供の性格が反映されています。「いじめ」をそのままにしておいて、日本はまだ団結して経済を発展させることができますか。私は教育の中でも、健康的な心理教育を重視すべきだと思います。

最近、授業で「いじめ」についての文章を読みました。驚いて目玉が飛び出そうでした。中学校の「いじめ」はともかく、小学一年生でも「いじめ」が起きているのは信じられません。例えば、靴に泥を塗られたり、同級生に消しゴムやお菓子などを投げつけられたり、椅子と文房具の中に死んだ虫を置かれたり、「やばい菌」などと呼ばれたり。それに、私は日本のドラマの『家政婦のミタ』と『リーガルハイ』の中でも、いじめの場面を見ました。日本ではいじめられて自殺した生徒がいます。中国ではこんなことはほとんどありません。どうして日本ではこんな事件が多いのかと思います。

日本の教育に比べて、中国の教育では、先生がすべての生徒を積極的に活動に参加させ、子供の時から団結と友愛を教えています。それに勉強においても、先生が優秀な生徒に成績の悪い生徒を助けさせたり、無口な生徒と体が弱い生徒にも関心を与えさせたりしています。生徒の成績より、生徒が健康的な心理状態であることを重視しています。

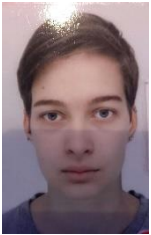
しかし、日本のある先生は、大部分の生徒に自分が嫌われることを恐れて、いじめられている生徒を無視しているそうです。それに、日本の生徒はいじめられると恥ずかしいと感じて、我慢してしまいます。そうすると、「いじめ」はますます深刻になります。

いじめられた生徒は身も心も大きなダメージを受けます。心が歪んでしまうかもしれません。とてもかわいそうです。いじめる生徒は人に関心を持ちません。団結の意識はますます減っていきます。それは、日本の経済などに悪い影響を与えていると思います。

日本の大人たちは、日本の未来を安心して彼らに任せられますか。「いじめ問題」を重視すべきだと思います。一緒に子供たちを守りましょう。

【努力賞】海外の大学生

「部活」で成長する日本の若者



ヒンスベージェー・クロエ

(フランス。ストラスブール大学・女・十八歳)

「日本人の生活について何と申しますか」と、フランス人に聞いたら、普通は「忙しそうだ」とか「労働時間が長すぎます」などの答えが出てきます。

確かに、海外、特にフランスでは、一生懸命働く日本人のサラリーマンのイメージが広がっている。

その理由は、インターネットでよく見かける「地下鉄の中で眠っている人」の写真とか、「過労」に関しての記事などからです。

この「会社のために生きている日本人」の姿は、有給休暇を五週間も取ることができる、休み好きなフランスの社会人には、とてもおかしく見えます。

日本人について、ほかによく聞く話は「本音と建て前の違う日本の文化は嫌です」ということです。

私も、変なことだと思っている。もちろん、相手によって話し方が違うのは当然です。

社長と話す行動は、友達と話すときと同じわけではない。だけど、いつも他人の気持ちのことがばかり考えて話したりするのは、私としては、やりすぎではないかと思えます。

それでも、いろいろなネガティブなところがあるにも拘らず、日本の社会や生活の中で、素敵なところもたくさんあると思えます。

例えば、私が個人的に憧れるのは、日本の中学・高校の「部活」です。

授業の後で運動、または美術的な活動をするのは素晴らしいことだです。フランスでは「部活」などありません。普段、授業の後に勉強したり、本を読んだり、ソーシャルメディアを使ったりしています。

日本の若者は「部活」で成長していると思います。他の生徒と一緒に同じ目標に向かって努力して、社会的なことや価値観を勉強することができます。そうした日本の様相が私は好きです。

ヨーロッパ人の既存概念と違って、日本の社会は華やかで複合的だと思います。



「ちらし寿司」で恋した「日本」

霍 雨佳

(中国。海南師範大学・女・二十歳)

『日本』は、どんな国だと思いますか」という作文のテーマについて、友達に聞いてみた。

友人A…「国土面積が小さい。火山、地震が多い」

友人B…「天皇制、先進国、わが国を侵略したバカヤロー！」

友人C…「化粧術がすごい国。女性は結婚したとたんに専業主婦になっちゃう気がする」

友人D…「名探偵コナン最高！」
・・・といった答えだった。

時計を巻き戻して、三年ほど前、まさかの偶然で、私は日本語学科に入った。「くだらない」と思いながら五十音を勉強し終わったが、まだ日本語を好きにはなれなかった。ある日、「大学の日本語コーナー」に参加した時。先生の奥さんが作った「ちらし寿司」を食べさせてくれた。見たこともない形のおすしを食べるのは初めてだった。思わず、「おいしい！」という言葉が出てきた。休憩時間に、奥さんが作り方、特に、人参で桜の花の形の「桜人参」の作り方を教えてくださった。休みの時、自分の部屋で「ちらし寿司」に挑戦してみたが、初めてのせいも、あまり美味しくできなかった。でも、あの日から、日本への憧れが生まれた。

週末、親友と町の日本料理店へ行つて、「そば、天ぷら、すきやき」などの「和食」を食べている。おいしい「和食」を食べると、気分もよくなる。「細長い日本の形が天ぷらと似てる！」という発見もあった。でも、多くのお店は本場の味ではない、らしい。

「和食」は、「自然を尊重する」という精神が出发点らしい。色々工夫されている小さな食べ物を通して、日本の文化、歴史、言語など全般的に興味を持つようになった。

とうとう、「日本」という国に恋に落ちてしまった。

今、「日本はどんな国だと思いますか？」と聞かれたら、あの時、感動的な気持ちを与えてくれた「ちらし寿司」を思い出して、「おいしい国ですよ」と答える。おいしい「ちらし寿司」のおかげで、私はもっと勉強して日本語を磨きたい！もっと日本のことを知りたい！友達にも本当の日本の姿を見せたい！という願いが、どんどん強くなってきている。

幸いに、交換留学生として日本に行くことになった。いよいよ、心の中の恋人に会える。わくわくとした気持ちでこの作文を書いている。

【努力賞】—海外の大学生



驚きがいっぱいの「国」

顧 淋淋

(中国。大連工業大学・女・二十一歳)

「日本はどんな国ですか」と聞かれると、私は必ず「驚きがいっぱいの国」と答えます。

今年の一月、私は短期留学生として群馬大学に行きました。その時、初めての日本でしたが、大学での勉強だけでなく、普段の生活でも、いろいろな体験をして、すごく楽しい時間を過ごすことができました。

そして、新しい知識を身につけただけでなく、いままでの知らない日本のことも知りました。

例えば、ウォシュレット、水に流せるトイレットペーパーです。

ウォシュレットは場所をとらないし、冬は暖かい便座に座れて、必要に応じて清潔感を保つことができます。そして、流せるトイレットペーパーで他人がふいた紙を見なくてすむし、においも残りません。とても清潔で、驚きました

日本の製品・商品を見ると、職人気質、伝統を守ること、またプロの精神、細かいことへのこだわり、などがすばらしいと思います。技術だけでなく、伝統を守ろうと懸命に打ち込む心意気がステキです。後世にも受け継いでいってほしいです。

また、日本人は、いいと思ったことを、実際に行動に移して、現実のものにするところが素晴らしいですね。例えば、ホットケーキに、アイスクリームやチョコレート、いちごのトッピングを加えるというアイデアを、すぐに行動に移して、現実の商品にしました。

それから、「時間通りに運行される電車」に代表されるように、日本社会のあらゆるものの規律がきちんとしています。また、日本の道路は、ゴミが落ちておらずキレイですね。中国には、道にゴミを捨てることをなんとも思っていない人がいて、ゴミがよく落ちています。

日本には、いろんなファッションもありますね。すごく印象に残り、驚いたのは、ペットの犬のファッションです。犬が、人間以上のいい服を着ていて、それを見た時はビックリしました。中国ではこういう犬のファッションはありませんから。

日本は、驚きがいっぱいの「不思議な国」だと思います。また行きたいです。

「ウチ」と「ソト」の距離

陳 璐璐

(中国。南京大学大学院・女・二十三歳)



勉強すれば勉強するほど「日本」という国が分からなくなってきた。

日本語を勉強する前は、「恥」、「集団主義」などといったタグのような特徴が印象深かった。しかし、今は、いくつかのキーワードで「日本」という国を描き出すのは難しい。

日本人の学生は授業中、先生の許可がなければほとんど互いに交流しないとされた。授業の内容について、何か疑問や感想があるとき、中国では小声で討論する場合が少なくない。日本人が、互いに話さないのは恥ずかしがり屋だからと思ったが、そうではないらしい。「人と人之間に見えない柵があるので、勝手に他人の空間に入り込むべきではない」と考えているからだ」と、日本人のクラスメートが教えてくれた。

ただ、その「柵」は「しがらみ」になる場合があるかもしれないが、その距離感がとても意味深いと思う。距離があるからこそ美が生まれる。その距離は「余白」でもあり、「曖昧」でもある。距離によって「ウチ」と「ソト」がはっきりとして分けられる。

ウチとソトの間には、「淡い関係」もあれば、越えようのない深い「溝」もある。その距離感は、言葉によって、様々に表れてくる。

敬語を使う時、敬意を表すことができるだけでなく、距離を保つことができる。一方、対等な言葉使いである若者の「ため口」は、距離を縮めるとともに「柵」を「きずな」に転化させることもある。日本人は、その両者を自由にスイッチできるそうだ。

世界で敬語を使わない国の存在が想像できないと、日本人の友達から聞いたことがある。敬語の使い方は複雑だが、きれいな日本語を話すには必要であり、敬語をしつかりと使うには、心と体で、その場の空気を読むことが肝心なのだろう。日本人が敬語を自在に使いこなすのは、長い間、「以心伝心」という伝統を持ち続けているからだだろう。

人間同士の距離が消えることはないが、「ウチ」と「ソト」の距離は変わらないわけではない。歳月の流れにつれて、絶えず出会ったり離れたったりして変わりつつあるのだ。

「ウチ」と「ソト」の距離は、日本社会を窺う記号の一つかもしれない。



「俳句」を作ってみました！

エルデネオチル・サンチル・オヤー

(モンゴル。モンゴル国立大学・女・十九歳)

私は子供の頃から文学が好きで、本を読んだり、詩も読んだりしました。また、時々詩を書いていきます。高校生の時、ある世界の詩の本に「日本の俳句」について説明があり、日本の代表的な俳句もありました。その時、「そんな短い詩があるんだ」とびっくりしました。しかし、普通の言葉を使っているので、俳句を書くのは簡単ではないかと思いました。そして、大学に入学し、日本語を勉強し始めました。その時から日本人、日本文化を知り、俳句にも興味を持つようになりました。「モンゴルの詩」と「日本の俳句」について、考えてみたいです。

モンゴルで有名な詩人・ナツアグドルジ(1906—1937)の「私の故郷」という詩は有名です。この詩の最初の四行を翻訳すると、「高い荘厳なヘンティー、ハンガイ及びサヤンの山 森林と厚い樹木の尾根一北部の美しさ ゴビの砂漠メネン、シャルガ、ノミンの間そして、南の砂漠の海 これは私の故郷 素敵な国、私のモンゴル」という詩です。

私が初めて読んだ日本の「俳句」は、松尾芭蕉の「古池や 蛙飛ぶ込む 水の音」という俳句です。

この二つを比べてみたいと思います。モンゴルの詩は四つ以上の行から作られています。また行の最初の字は同じでなければならぬ、という決まりがあります。

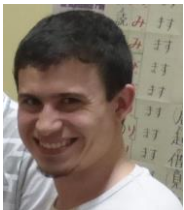
俳句は「五・七・五」の三つの行から作られます。内容に季節の言葉が含まれます。

モンゴルの詩は、ある物の美しさを説明したり、意識させたり、誇ることが多いです。これに対して、俳句は瞬間の感情を表すと思います。俳句は短いけれど、深い意味が込められていることが多いです。それを理解するためには、自分で想像し、考えることが重要です。芭蕉の俳句を見れば自然の美しさを感じたことがわかります。俳句は、ある物がなぜ美しいか、を小さいことで表現します。

最近では、モンゴルの詩人も日本の俳句のように短い詩を書き始めています。俳句は短いから読む人は楽であり、また、日常のことに合わせて書くから、わかりやすいと思います。

私は俳句に関心を持って、時々俳句を書いています。小さいことでも、気が付かなかったことを書いて、みんなに分かってもらいたいです。上手ではないですが、読んでくださいます。

行ったことのない「不思議な国」



クリスティアン・グティエレス

(ウルグアイ。ウルグアイ共和国大学・男・二十一歳)

まだ、行ったことはありませんが、「日本」はとても特別な国です。

日本に行ったことのある人に聞いたり、いろいろ日本の事を勉強すると、地球にあるどの国と比べても、他の国にはない違うところがたくさんあって、本当に特異な国だと思っています。

日本の歴史は長いですが、言語は一つで、制限があったので、隣の国とのコミュニケーションが難しかったと思います。「日本の国」は島でできていて、江戸幕府の時に他の国と交流がなくなったので、日本の文化は「日本の中で作られた」ということだと思います。

国は人が作るものです。「日本」に行った人に聞くと、みんな同じ答えを言います。

「日本人はとても優しい」とか「町がきれいだ」とか「文化とテクノロジーが素晴らしい」とか。

私にとって、日本人の全員が優しいと信じるのは難しいですが、確かに日本人の道徳心は強いと思います。自然や環境を大切にしていますから、きれいな町や景色をいっぱい見ることができるとでしょう。特に、各地の季節の色々な行事や祭りは有名です。例えば、桜の花見は、世界の誰でも一度は見たいと思うのではないのでしょうか。

日本人の「どんなことにも頑張る精神」は尊敬することができます。頑張る精神は、子供の時から教えることが大切です。「立派な人間になること」は簡単なことではありませんが、人は小さい時から、自分で問題を解決することがとても大事で、日本では、小学校の時から学校で教えています。

いつも前に進むことを考えている国は、大事なことを決断しなければならないし、勇気ある決断をする決意を持っています。日本は、たくさん地震や津波があっても、日本人はいつも前を見て未来を考えながら進んでいます。

「仕方がない」という言葉は、ただ諦めるだけ、ですから私は好きではありません。

日本料理はすごく美味しいし、公共の交通はとても便利だそうです。日本は新しいもの、例えば、アニメや漫画やゲームなどを、これから作り出すでしょう。

本当の日本はまだ知りませんが、私にとって間違いなく、日本は面白くて「不思議な国」ですよ！

完璧ではないが、「素晴らしい別世界」



アエーシャー・ダルマシリ

(スリランカ。ケラニヤ大学・女・二十二歳)

アジア大陸の東にある、北東から南西にかけて弓のような形に並んでいる「日本」という島国に、私は何気なく心を奪われました。日本は世界第二次戦後から、経済が高度に成長し、豊かな国になったのは国民の努力のためだと思います。日本とアジアの真珠スリランカの間には空と土のほど差があります。日本は先進国ですが、スリランカは発展途上国です。

私は二年前、二週間だけ日本に行ったことがあります。

日本といったらすぐ思い浮かぶのは桜、ふじ山、おしんです。それは目に見える範囲です。日本人は礼儀正しくて勤勉で知的、そして真面目な国民というイメージを持っています。

日本のサービス精神、接客態度は素晴らしいと改めて思います。スーパーでは、いつも「いらっしやいませ」と言ってくれます。スリランカでスーパーの店員さんに「すみません、にんじんはどこに売っていますか」と聞いたら「わからない。今忙しいので他の人に聞いて」と言われます。

また、日本のトイレにウォシュレットが付いているのをビデオで見たとき、世界的にもすごい珍しいものだと思います。日本ではどこでも無料でトイレを使えると聞いてショックでした。立派な設備がないのにスリランカのトイレは一〇ルピーを払わなければならぬからです。

そして、日本人は歩くのがとても早いです。日本はストレス社会であることが一つの原因ではないでしょうか？どんなことでも、日本人は時間にとっても厳しいと思います。待ち合わせや会議などはもちろん、電車の到着時刻や宅配ピザが届く時間など日本人は少しでも「遅れる」ことは許されない行為です。時間に対して、プレッシャー、大きなストレスになってしまいます。

日本人の「本音とたてまえ」という二つのことは、日本人の本当の気持ちを理解できないから困ります。完璧な国はぜったいにないし、日本について、「これはちよつと、」と思うことはあります。でも、日本は私の中でかなりの好印象です。テクノロジーの分野ではアメリカよりもずっと進んでいます。日本は誰もが好きになるようなオリエントアルマジロっぽい雰囲気があると思います。私は、「日本」という国を表現するなら「素晴らしい別世界」だと思います。

【努力賞】—海外の大学生



「小確幸」しょうかつこうがいっぱいの国

劉超

(中国。天津工業大学大学院・女・二十三歳)

日本の作家・村上春樹氏はエッセイ集『ランゲルハンス島の午後』の中で、「小確幸^{しょうかつこう}」という造語を作り、「小確幸とは、小さいけれども、確かな幸福というものだ」と説明しました。この造語を見た瞬間、『日本』という国にぴったり相応しいという感じがした。

日本は、正に「小確幸」がいっぱいの国だと思います。

世界の隅に込み合って生活している日本人は、国土面積が小さいのに、人口がかなり多いという事実の下で、美味しい生活を送っています。日常の小さいけれども、確かな美を吟味して、確かな幸福を感じると思います。「おいしい生活」というのは、昭和時代に有名なコピーライター・糸井重里によって作られたものです。そのキャッチコピーが人気があるのは、広告として、お客様に販売するのは個々の商品より、一つのライフスタイルを提案しているからです。この面白い広告のキャッチコピーからして、生活風情を重んじる日本人が送っている「おいしい生活」も一つの「小確幸」と言えるではありませんか。

日本人の繊細で、敏感な性格を表す日本の文学作品が少なくなく、外国人にとって、特に「もののあはれ」、「侘び」、「寂び」などの文学理念を理解することが難しいです。

俳句、和歌、茶道、花道、枯山水なども、自然に親しみ、自然の心に戻ることを唱える日本人が生活の「小確幸」を探るために作り出した風雅な芸術でしょう。人々の生活に源を発する「小確幸」は、そのまま芸術という高度に至るのです。

日本は、「小確幸」を有する国だと言えます。保育所などに申請しても入所出来ない子どものため、子育て中の親が「保育園落ちた日本死ね」と言ったこととか、「経済再生」を目指す安倍内閣の「アベノミクス」などの「経済政策」とか、社会保障とか、平均寿命の延長とかは、国民に恵みを与える「小確幸」そのものではありませんか。

村上氏は、「小確幸がなければ、人生はただのかさかさした砂漠のようだ」とも言いました。近年、日本旅行ブームが続いています。多分、これも、海外の観光客たちが日本の「小確幸」を経験したがるからだろう、と勝手に推測しています。



「文化」の似ているところを探す

マリア・フロレッタ

(インドネシア。ブラウイジャヤ大学・女・二十一歳)

私は大学四年生で、四年間以上日本語を勉強しています。小さい穴から覗くように、日本のことはまだ一部しかわかりませんが、インドネシアと同じ「文化」があることを教えてくれました。

昔から日本のアニメとドラマと映画を見て、主題歌をよく聞いて、とても日本に憧れています。初めて聞いたのは小野正利の「You are the only」という曲です。その時はまだ小学生で、歌詞の意味がわからなかったですが、ほとんど毎日聞いていました。聞いたなら、心が和んでいて、夜はよく眠れます。中学生になった時、アクアタイムズとコブクロとMr.Childrenの曲を色々聞いて、「いつか日本で音楽家になりたい！そのために、大学で日本語

の勉強をしたい！」と思うようになりました。

そして、大学に入学し、日本文学を専攻しています。日本文学を専攻してから、日本との絆が深まったように感じます。大学で日本人との文化交流会などに参加して、日本のことが少しわかるようになりました。ここに来た日本人の学生たちも、故郷のことをたくさん語って、「博多の豚骨ラーメンが一番おいしいよ」、「道頓堀に美味しいものが多いよ」、「群馬の草津温泉最高だよ」、「日本に来たら絶対札幌雪祭りに来てね」と色々言ってくれました。

そして、日本では、皆、ちゃんと信号を見て運転するから安全で、道を渡るのも安全です。うです。しかし、インドネシアは人口が多くて、乗り物も多くて、どこでも渋滞ですから、勇気を出さないと道を渡れません。しかし、大事なものは人間関係だと思います。日本の人は初めてあった人に温かく扱います。それは「おもてなしの心」といいます。インドネシアでも「おもてなし」は日常生活の一部です。インドネシア人は、知らない人でもすぐ仲良くできます。このことから、日本とインドネシアの習慣や文化などには違いがありますが、似ているところもあると思いました。世界も同じだといいですね。

文化の違いを理解することも大切ですが、「似ているところ」を探すことも大事だと思います。日本語を勉強して、そのことがわかって、とても嬉しいです。私もいつか日本に行きたいです。日本に行けば、日本の美しさと素晴らしさを体験することが出来て、同時に、自分の国・インドネシアの良さも、もっとわかるようになると思います。

【努力賞】—海外の大学生



一つの漢字を選ぶと、「風」です

ヤーズ・アルプ・オクル

(トルコ。エルジェス大学・男・二十六歳)

まず一ヶ月前の宿題について話したいです。

大学の授業で、「『日本』について、一つの漢字を選びなさい。そして、その漢字を選んだ理由を説明しなさい」というテーマの宿題が出ました。漢字を一つ選ぶのはちょっと大変でした。ようやく一つ漢字を選びました。その漢字は「風」でした。なぜこの漢字を選んだかを、説明します。

一二七四年と一二八四年、つまり、元寇の時に強い風が吹き、台風が来て、日本を助けました。台風のおかげでモンゴル帝国の船が沈みました。それから、この台風は「神の風」と言われていました。この言葉の意味は、わかりやすく、とても強い言葉だと思います。だから「風」という漢字を選びました。

「神の風」といえば、ほかの意味もあります。第二次世界大戦の時、「神風」という言葉がよく使われていました。日本の「特別攻撃隊」のことです。そのパイロットたちは、一生懸命戦って、自分の国を守るために、自分の命を犠牲にして、死んでしまいました。このパイロットたちは「神風」と呼ばれています。

そして、二〇一一年の東日本大震災の時に、福島第一原子力発電所で津波による事故がありました。そのとき福島第一原子力発電所はとても危険な状態でした。命が危なくとも、原子力発電所の人たちは一生懸命、原子力発電所を守るために頑張りました。その人たちは第二次世界大戦の「神風」のように、自分の国を守るために出来る限りのことをしたと思います。

今の日本において、「神風」がどんな意味を持っているのか、よくわかりませんが、第二次世界大戦のパイロットたちも、福島第一原子力発電所の人たちも、日本を守るために、「神の風」のように戦いました。「風」が「『日本』はどんな国だと思いますか？」の答えです。

日本は、自分の国を守るために働いたり、戦っている人が多い「風」の国だと思います。がんばれ、日本！

【努力賞】—海外の大学生



「レストランのタバコ」と「刺青（入れ墨）」

ヤン・マモノフ

（フランス。ストラスブール大学・男・二十七歳）

私は二年前に休暇で二週間日本に行きました。東京と富士山と京都を訪れました。それ以降、ストラスブール大学で日本語を勉強しています。

初めて日本に行った時はあまり上手く日本語を話せませんでした。なので、自分の行きたいところを見つければ難しかったです。しかし、困って道で地図を見ると、たくさん日本人が私のところに来て、英語で話しかけてくれました。そしてどの地下鉄に乗ればいいのかなどを教えてくれました。私は彼らの行動に驚きました。日本人はとても親切だと感じました。フランスでは、見知らぬ人をこのように助けることはあまりないと思います。

日本に行って思ったことは、道にはごみが全く落ちていなくて、町がとてもきれいだということです。また、禁煙スペースが外に設置されているので、たばこのごみはあまり道に落ちていないところもとても良いと感じました。しかし、レストラン内でタバコを吸うことは禁止するべきだと思いました。フランスではすでに禁止されています。コンビニはとても便利だと感じました。コンビニはあちこちにあって、24時間開いていました。フランスではこのように一日中開いている店はなく、日曜日には全ての店が閉まります。

けれども、日本にも悪い点があります。私が刺青（入れ墨）をしているせいで、いくつかの場所に入れないことがあります。とても悲しい思いをしました。外国人は皆やぐざではなし、私がやぐざでもないことは簡単に分かると思います。日本はもつと刺青に関して寛容になるべきだと感じました。

日本でしたことで一番良かったことは、日本庭園を訪れたことです。そこはとても素晴らしかったです。行くたびにまるで違う世界に入ったかのような感じでした。日本で見ただの中が一番きれいなものは、富士山でした。富士山に向かう電車の中で初めてそれを見た時、自然と涙が出ました。しかし、残念なのは、日が落ちるのがとても早いことです。フランスの夏は、夜の22時まで日が落ちません。

日本について思う点はまだまだありますが、確かなことは、私が今までで訪れた国の中で日本が一番美しく、きれいで、人々が最も優しく、親切だということです。これから日本のたくさんの方を訪れたいです。そして日本に行って勉強して、もっと上手に日本語を話せるようになりたいです。

【努力賞】—海外の大学生



一番好きな「本音と建前」

ノッパスイット・ウオンスイリ

(タイ。ウボンラチャタニ大学・男・二十一歳)

皆さんは日本語から何をもらいましたか。私はたくさんのもをもらいました。今、私は毎日、日本語の科目を勉強しています。たとえば、文法とか漢字とか日本語の文化の科目とか作文などです。勉強している科目の中で日本の文化の科目が大好きです。

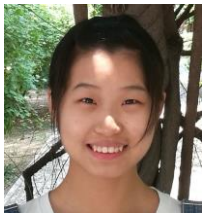
日本語を勉強することで私自身を見つけることができました。自分をよく知ることができ、好きなことが分かりました。日本の文化が好きで、もっと詳しく勉強したいと思いました。

高校二年生の時に、日本語の文化の科目を勉強しました。一番好きなのは「本音と建前」のことです。

初めてこのことを勉強して、素晴らしいと思いました。私は気がつきませんでした。こんなことはタイではないです。もしかして、日本人の考え方が分かるかなと思いました。たとえば「今日の夜ご飯にお好み焼きと天ぷら、どっち食べたい？」と聞かれて、「建前」の答えは「どちらでも食べたいです」と言います。でも本音では「どちらも食べたくない」と思っているのが答えです。私は日本人のこの文化が素晴らしいと思います。

この文化を勉強した後に、私は「日本人は相手の気持ちを大切にしている」と思いました。時々、本当の事を伝えないといけないと思いますが、この文化はいいと思います。日本語を勉強することで私自身を見つけることができました。自分をよく知ることができ、好きなことが何か分かりました。日本語は勉強すればするほど難しくなりますが、勉強がつまらないとか、止めたいという気持ちは全然ありません。

どんなに難しくても私は絶対に諦めません。皆さんは日本語から何をもらいましたか。



日本は「心の鈴蘭」

陳 柯君

(中国。山西大学・女・十八歳)

三月のことだった。姉妹校から来た一人の日本人留学生と友達になった。彼女に中華料理を体験してもらうために、ギョーザ屋に案内した。昔から中国ではお客さんを手厚くもてなす伝統が根強く残っている。その日、私も歓迎の意を表すため当然のように必要以上の料理を注文し、結局、食べ切れなかった。無駄になるような気がしたので、料理を包んでもらうことにした。袋に入れようとすると、留学生友達は「びっくりした。日本では持ち帰ってはダメだ。」と言った。

「え？食べ残しが多ければ、もったいないじゃないの。」と私は聞いた。

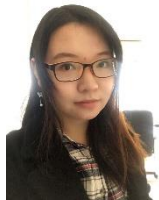
「それはそうだけど、基本的に日本料理の量は人々が一回食べ切れる量を出す。」と彼女はにこにこして教えてくれた。そうすれば、メンツが立つだけでなく、食物も節約できるのです。

中国では料理を残すのは「メンツ文化」と考えられている。もてなす側が注文すればするほど、熱心さを表すが、その一方で、いつの間にか料理を食べきめることはメンツを失う行為だと考える中国人の若者が増えてきた。普段友達と外食をするたびに、多かれ少なかれ食べ物を残すことは、もうお互いの暗黙の了解となった。政府の節約スローガンに忠じて持ち帰る場合もあるとしても、ある程度の食べ残しはそのまま放置してしまっている。しかし、「塵も積もれば山となる」、どれだけたくさん食べ物が無駄になってしまったかまでは想像がつかなかった。

日本の友達の理性的な暮らしぶり、及び生活に対する誠意に感動させられた。生活を尊重し、誠実に日々を過ごす姿勢は印象に残っていた。人間は社会環境に左右されやすい。人民はその国の縮図であり、思わず彼女の祖国について思いを巡らせた。

世界は花園だ。様々な花があるからこそ、活気に満ちる。各国は花だ。中国は華やかで熱心な牡丹、日本は天然で素朴な鈴蘭とは言えないか。日本語を学び始めてから、「日本という国は桜のように燦爛です。」という話をよく聞いた。なんとなく満開の桜は絢爛過ぎて、近づきにくいイメージを持っていた。しかし、今度の体験でそうではないと強く感じた。

「日本という国」に、「君は私の心に咲いている鈴蘭です」と言いたい。



心から人を気遣う「思いやり」

孫 青柔

(中国。東京大学大学院・女・二十二歳)

日本に来る前に「思いやり」という言葉をよく耳にしていた。大学時代に、先生は、その言葉には適切な中国語訳が見つからないと言われた覚えがある。いったいどういう意味だろうか、と気になって、調べたら、だいたい关心、照顾（面倒を見る）という訳が多かった。

なるほど、日本人は面倒見がいいのか、という考えを抱いたまま留学に来日した。

そして、バイトで小さな出来事を体験し、日本人の「思いやり」は、単に、人の面倒を見るというだけのことではなく、「心から人のことを思って、気遣いをする」ということだと、わかった。

生活費に追われ、コンビニでのバイトを始めた。レジをする際に、お客様を待たせないように、

列に並んでいる後ろのお客様を、隣のレジに呼んで会計をするのは暗黙の了解である。しかし、ベテランの店員と一緒にシフトが入ったある日、いつも通り並んでいるお客さんを自分のレジのほうへ来てくださるよう声をかけたら、ベテランの店員にそれを呼び止められた。いつも親切だったその店員さんに初めて怒られた。お客様を待たせるわけにはいかないから、私は間違っていないと思いつつ、ちよつと不快を感じた。

後で、その店員の話聞いた。レジとレジの間の距離が近いので、会計済みのお客様と会計待ちのお客様さんがレジのところまで、ぶつかることが起こらないようにしなければならぬ。それを防ぐために私に注意したのだった。

「あー、これがいわゆる日本人の『思いやり』だな」と納得した。

私もお客様が早めに会計できるように声をかけたつもりだが、私が声をかけた時は、お客様がぶつかりそうになったので、それを防ぐための注意だったのだ。そこまで考える「日本人の思いやり」には及ばなかった。日本に来て、このことが一番印象深かった。

どうしたら人のためになるのか、どのように設計したら人の生活がよりよく過ごせるのか、そうした「思いやり」の考えに基づいているからこそ、日本のサービス精神が世界中に評価され、日本人に親切な人が多いというイメージを各国の人に与え、そして、日本製の商品が世界中に好まれているのだと思う。

親切さを教えてくれた「和」の精神



朴 起範（パクキボム）

（韓国。関西大学大学院・男・三十五歳）

『日本』という国について、最初に思い浮かぶことは、「和」という精神です。

インターネットがなかった幼い頃、日本を最も身近に感じ、学ぶことができたのは漫画という世界からでした。楽しんで読んでいた「ドラゴンボール」や「ドクターランプ」などからは日本漫画の固有の世界観を感じることができました。さらには、日本独特の文化と思想、そして価値観も学ぶことができました。特に、中学時代に「スラムダンク」を読みながら、人と人との「縁」の大切さと「調和」の重要性を価値観として持つようになりました。そして、大きくなり、日本に留学に来たことで、ようやく「スラムダンク」を通じて作家が伝えようとしていた「和」の真の意味を知ることができました。

幼い頃から日本の文化に接し学びながら、いつも感じていたことは、日本に行って生活をし、日本について学びたいということでした。このように幼い頃から抱いていた夢は、年齢を重ねても、諦めることができず、必然的に自らを留学へと導いていきました。

しかし、大きな期待と夢を持ち始めた留学生活は順調なものではありませんでした。特に、拙い日本語の実力は学業にも日常生活にも、とても大きな障害となりました。日本は漫画のように想像力が溢れていて、楽しいことばかりの世界ではありませんでした。最初始めたアルバイトでは指示されたことを反対の意味で理解したり、学校ではチーム課題のことで苦労したこともありました。

しかし、そんな時、私に手を差し伸べ、助けてくれたのは、日本に来てから結んだ「縁」と、その縁との「調和」でした。結んだ「縁」は私が分からないことを親切に説明してくれ、私に足りないことはチームで「調和」を取ることで補い合い、助けてくれました。それが、『日本』の「和」の真の意味でした。

このように、大昔の大和政権から始まった「和」の精神は、長い時間を経て、慣れない環境にいる私にも、『日本』という国の親切さを、そして楽しさを教えてくれました。

気がつけば日本の留学を始めて三年、幼い頃は漠然と学び、大人になってから確実に感じた「和」を、私は今、誰かに伝えようとしています。私から先に歩み寄り、手を伸ばし、日本からもらった掌のぬくもりをまた誰かに伝えることで、この「和」をつなげていきたいと思います。

このように、私にとっての『日本』という国は、「和」で始まり「和」で結ばれていきます。

【努力賞】—留学生



制服への「こだわり」

曹 馨文

(中国。群馬大学・女・二十歳)

最近、私の友人が就活に取り込んでいます。しかし外国人なので、やはり最初は日本の就活がよく分からなかった。そして、ある日本の先輩の指導をもらう過程で、理解しにくいことがたくさんあった。

説明会の数日前、彼女は私服で参加するつもりだったが、先輩に止められた。説明会は面接ではなく、さらにスーツを着る必要がないと明記されているが、先輩は彼女をスーツに着替えさせた。さらに先輩は彼女のカバンを見て、買い換えようと言った。彼女には、どうしてカバンの種類まで限定するのか、さっぱり分からなかった。先輩も「そうだね、よく考えると自分も分からない」と笑った。

どのような時にどのような服を着るのかという「こだわり」は、恐らく日本の「制服文化」が生んだ一つの原因だと感じた。子供の時見たアニメの中で、かわいい制服を着たいという動機で高校を決めるというシーンがあり、不思議だと思った。そして実際に日本に来てみても、やはり第一印象は制服だ。小学生から、施工労働者、レストランの店員まで制服を着ていて、一目瞭然で職業がわかる。

中国で制服が厳密に決まっていない建設業の労働者を見ると、地位が低い大変な仕事だと思いい、少し同情をしてしまう。しかし、日本できれいな黄色い制服を着る労働者を見ると、彼らたちはこの都市の建設業者で、尊敬に値する仕事をしていると思え、初めてかっこいいと思った。

中国では、普通の仕事に制服を規定することは少ない。そして色眼鏡で職業を見る人がいるから、制服は仕事場だけで着る服になっている。しかし、日本の街では、制服を着ている人をよく見かける。

日本人がこれほどまでに制服を愛している理由が二つあると考えている。一つ目は日本人がもつと平凡を喜び、しっかりと地に足を付けているからだ。普通の仕事だとしても自分の仕事を誇りに思い、情熱を持っているから、自信満々で制服を着て街を歩いているのだろう。二つ目は制服とは仕事に対する敬意だと思われるからだ。日本は制服をプロがデザインしている。少々大変な仕事でも制服のためにプライドとその仕事への偉大さを感じることができる。

人は平凡に生き、職業に貴賤はない。人の目を怖がる必要はない。人前に自分の職業を晒すことを怖がる必要もない。もしもつと自分の仕事に自信を持って生活したいなら、制服はいいきっかけになるのではないだろうか。



双方向の「親しみ」を持てる国

謙 芷萱

(台湾。早稲田大学・女・二十歳)

日本の留学生生活は三年目になり、日々、日本文化の驚き、感心、また新たな体験が数え切れない。お客様に対するおもてなし、食のこだわり、生活から湧くアイデア、人々と接する価値観、日本人も苦手な敬語、強い集団意識、しみじみとした気遣い、サブカルチャーの発展、アニメなどのオタク文化、わいわいがやがやしている飲み会文化、社会的な上下関係、また、西洋への憧れと恐れなど。毎日様々な斬新な日本の一面を、実感している。

国際的に評価されている日本は「和」の国、「おもてなし」の国、「アジアの中の先進国」などだ。日本に留学して特に感じるのは、「日本」は「台湾と親しみやすい国」だ、ということだ。

バイト先で、お客様に「チェン(謙)さんはどちらの国の方ですか?」と聞かされることがある。「台湾です」と答えると、相手の反応は、ほとんどが「台湾はいいところですよね!」とか、「台湾大好きです!」という褒めの言葉です。

第二次世界大戦の時代背景で生まれた日台関係だが、現在の日本の若者たちも様々な台湾の魅力を感じているようだ。お客様が語った台湾旅行の思い出によると、有名なアニメ「千と千尋の神隠し」の舞台の一つになった「九份」の夜の景色、まるで映画のように輝いていたという。安く食べられる夜市のワンコイン屋台料理は日本に戻ってきてても恋しい味ようだ。そして、台湾人の熱情的なパッションとしみじみとした人情味は、台湾旅行の最高の醍醐味だそうだ。そして、台湾を好きになったという。

台湾は親日国だ、とよく言われるが、同時に、「日本」は親台国ではないでしょうか。友好とは、単なる一方交通の友好だけでは出来ない。必ず両国の人々が双方向の親しみを持つことが大切です。

日本人が台湾に親しみを持っていることは、日々の留学生活で感じられる。今でも鮮やかな印象として残っているのは、近所の自転車屋さんのおじいさんだ。私の初めての日本人の友達です。私が台湾人であることを知って、二十年前に台湾旅行をした思い出を色々話してくれた。嬉しそうな顔をして、その時に撮った白黒写真を自慢気に見せてくれたのがずっと忘れられない。

台湾のことを大切にしてくれる人に感謝の気持ちでいっぱいです。

二十年後の私も、おじいさんと同じような気持ちで、日本の思い出を大切にしていって、楽しく話ができるように頑張りたい。

【努力賞】—留学生

一緒に困難を乗り越える国



チャエム・ソンレン

(カンボジア。宇都宮大学。男、二十二歳)

私は二〇一三年にカンボジアで高校を卒業してから大学の日本語学科に入った。日本語を勉強する前に、日本語を聞いたこともないし、ゼロからの勉強だった。最初は日本語を勉強する目的を意識していなかった。日本語だけに注目し、日本はどんな国か、日本人はどんな人か全然考えていなかった。

日本語を勉強して一年間経った時、日本人と話す時、いつも「日本語が上手ですね」と言われた。本当に嬉しかったが、よく考えてみると、嘘だとわかった。先生がいつも日本人はお世辞を言うのが得意と言ったからだ。

三年間経った時、大学から、「一年間日本に留学する」といういいチャンスを与えてもらった。ようやく私の夢が叶って二〇一六年九月に来日した。日本に来て最初の一週間は寂しくて、帰国したい気持ちがいっぱいだった。でも、知り合った一人の日本人が私をいろいろ支えてくれた。彼の友達をたくさん紹介してくれた。その時から私の寂しい気持ちもだんだんなくなって、日本人にネガティブなイメージもなくなった。忙しいが、私は日本での生活をとても楽しんでいる。日本人の性格をわかるようになった。日本人は、なかなか仲良くないれないが、一度友達になったら大事にしてもらう。本当に優しい気持ちの人たちだ。例えば、好きではないものがあつたら、「いや、これ嫌い」とは言わないで「これはちょっと」と言う。相手のことをよく考えて、相手が困らないようにしているからだ。

二〇一一年三月十一日に日本で大災害があつた時、被災した人たちが、みんなと一緒に困難を乗り越えようとする姿は、世界中に「素晴らしい日本人」を示した。日本人は本当に優しい人たちだと思う。

日本の国は本当にきれいなところだ。どこに行ってもごみはほとんどない。車やバイクを運転する人たちはちゃんと交通ルールを守っている。全国どこへでも電車で簡単に行ける、日本は羨ましい。

日本に住んで半年だがいろいろな新しいことを体験した。さらに日本人の生活や仕事を勉強したいと思っている。そして、帰国してからカンボジア人に日本と日本人の素晴らしさを伝えてあげようと思っている。カンボジアも日本のようになってほしい。日本は私の第二目の故郷だ。私は日本が好きだ。



集団意識が強い大学の「部活」

任 偉 漆

(中国。一橋大学・男・十九歳)

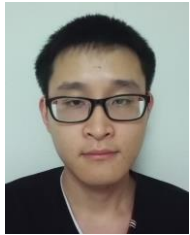
私は大学のワンダーフォーゲル部に所属している。今年で六十七年目を迎えるサークルだが、長い歴史の中で、外国人留学生の入部は私が初めてである。この団体が長年存続している背後に、日本人の何かがあるのでは、という疑問を持ち入部した。外国人という視点でその答えを見つけようとした。

一年の活動を通じて、少しずつその答えが明らかになってきた。まず、日本人には強い集団意識が存在する。集団を動かし、運営するために、みんなが力を出している。個人個人ではなく、集団全体のレベルを上げることが目標としているのも日本の部活の特徴である。そのため、上級者から初心者へのサポートが多く見られる。そして、集団意識を持つ部員は、集団に対する責任を感じて、積極的に「新歓(新入生歓迎コンパ)」などに参加して、集団に役に立とうとしている。

二つ目の理由は、ルールに従うことである。各集団には「明文化されたもの」と「暗黙」のルールがある。そのルールは変えられることは少なく、長年引き継がれている。そのルールの下で、部員は一人ひとりが先輩から教育を受け、必要とする能力などが身についたら、また後輩に教えるという循環が繰り返されている。そして、毎年どの時期に、どういう活動をするのかも恒例となり、何もかもルーティン化され、みんなはそれに従っているため、集団は非常に安定している。

最後に、日本の大学生は、自己紹介の時に必ず、自分が所属しているサークルを紹介する。均質化された日本社会において他人と区別する手段なのかもしれないが、日本人は、趣味に相当の時間と精力をかけている。そのため、部活も趣味をする場として大切にされている。部員は、新入生を加入させようと必死になり、OB、OGはお金を出して、部活の活動を支援し続けている。

しかし、団体を存続させる日本人のこれらの素晴らしいところも、時に外国人である私を戸惑わすことがある。例えば、集団に暗黙のルールがあるが、それが説明されることなく、自分がそれを分らないため、適切な行動をとるためにどうすればいいか分からないことがある。そして、みんな一人ひとりのキャラが鮮明で異なっているのだから、あまり集団意識が強すぎると、同質の人だけが集まり、小さい集団として外部から閉ざされているような気もする。



みんながいる「自分の居場所」

顔 夢達

(中国) 熊本大学・男・二十一歳

熊本へ留学に来たのは半年前のことだ。日本で友達を作ろうと思ったが、最初は生活の接点が殆どなく、浅い付き合いしかなかった。しかし、大学や地元で様々なイベントに参加するうちに、私は次第に「自分の居場所」というものを知った。

日本人の付き合い方は、同じ場所にいる人々との付き合い方を大事にしているようだ。

例えば、大学の研究室で読書会が開かれるとき、まずはお茶を入れ、気軽なお喋りから始まる。その何気ない普通の会話から、穏やかな雰囲気を作り出される。初めての参加でどきまぎしていた私が、落ち着いてその場に溶け込むことができたのは、まさにそのおかげだった。ほんの些細なことにすぎないが、そこから日本人との付き合い方がわかった。つまり、だれか特定の一人ではなく、「人が集まる場所」で他人と親しみ合うことだ。

『デジタル版・日本語教材【『日本』という国】』という教材の『八章・日本人の「行動様式」』には、「日本人は集団志向が強い。具体的な利益だけでなく、精神的な安心も得られる」という一節があった。このような安心感が持てるのは、同じ居場所を持つ仲間がいるからだと思う。

そう考えたからこそ、私はその読書会以来、しばしば研究室を訪ねるようにした。日々の挨拶から定期的な食事会まで、研究室のメンバーたちと共に過ごす経験を少しずつ積んでいくだけで、留学生活は一層楽しくなってきた。この春休み、研究室の飲み会に誘われた。そのメンバーたちとのつながりがさらに深まり、心に暖かい充実感が湧き上がってきた。飲み会のみならず笑顔で向き合い、息を合わせるように楽しむことが、心から嬉しいからだ。

また、日本人同士のつながりには、「町」という意識も非常に重要である。それは、親類縁者を中心とする中国の人情意識とは大きな相違点だと言える。例えば、地方の祭りに行くと、自然と長い仮装行列をした人々が見られる。その行動には、一種の連帯感がある。それは、同じ所に生きる人との絆によって体得した帰属感でもある。それに比べ、今の中国には、町の人たちが協力して賑わいを作るような祭りは消えつつある。その意味では、「人とのつながり」を重んじる日本人の心は学ぶべきものではないだろうか。

私は、人とのかけ合いを大切にすると日本が素晴らしいと思う。逆に言えば、日本人と親しくなるには、まず「みんなのいる場所」を見つけなければならない。共に楽しむ人と、同じ時間を過ごせる場所を持つのは幸いなことだ。その場所をより快く過ごせるように、自分も力を出していけば、いつか、そこは「自分の居場所」になるに違いない。



素敵！「バカまじめな日本」

レブヤン・マギストラ・ユリステイラ
(インドネシア。東北大学・男・二十二歳)

小学生の時、僕は初めて「恐怖」を知った。それは歴史の授業だった。日本がオランダからインドネシアを解放した、いや、奪ったことだった。日本はスマトラ島より小さいはずなのに、どうやったらオランダに勝っていたかと考えた僕。これは一つの小さなきっかけだった――。

四年前、僕はママに電話した。「ママ、僕日本の大学へ留学することに決まったよ」。

「はあ？なんで？」。なぜかちよつと嫌な声で聞くママ。

「いやあ、学校に奨学金情報があったから、ちよい試しに」

「まあ、受かったらいいよ。自分がやりたい事をやればいいよ。あなたの兄たちみたいにしないよ」

僕には二人の兄がいる。彼らは自分のやりたい事が親にあまり許されなかった。今回はもう気が変わったみたい。

数日後、面接日が来た。なんということだ。日本人の先生方が直接、面接しにいらつしやいました。最初は驚いたが、よく考えたら「流石日本」と思った。何が流石か、それはその真面目さだ。だって、わざわざ八時間を使って、インドネシアに来られました。感心した。僕は真面目に質問を答えて、無事に日本に来ました。

初感想は「綺麗だな」。後は、「凄イトイレハイテク」、「新幹線早い」、「英語下手ね」。いや、最後の感想は自分にも言うものです。本当です。すいません。

僕は東北大学に入学した。英語コースに入った。化学を学んで、日本の社会を観察している。勉強は勿論、アルバイトもした事がある。今まで色々あったが、今年の九月に卒業予定です。一年間の留年だが、経験が沢山貰った。良い事から悪い事まで。

「十人十色」ということわざがあるが、僕は、日本は「十人一色」がピッタリと思う。いい意味でも悪い意味でも。みんな一緒、みんな良い。平等で平和がある。違う色があったら、なんだかんだで、同じ色になる。郵便局のCM「バカまじめ」も日本の姿だと思う。

バカ程に真面目な日本人。一方、インドネシア人は「真面目バカ」だ。真面目にバカな事をするインドネシア人。なんか急に目から涙が出そう。これが、ぼくの考えた『にほん』です。無茶苦茶ですが、やっぱり「日本」が素敵です。



「おもしろい」日本

劉 天琦

(中国。山口大学・女・二十歳)

日本に来て以来、「おもしろい」という言葉を何回も聞いた。これは褒められているのだろうか、それとも、からかわれているのだろうか。分かってきたのは「おもしろい」は好意的なことばであって、否定的なものではないということだ。たしかに、日本は、いろいろなことが「おもしろい」。そして、日本に住んでいることも「おもしろい」!

町で道を尋ねると、誰に聞いても辛抱強く教えてくれて、ある人は、私を行きたい場所へ連れて行ってくれる。日本に来たばかりの外国人にとって、安心させる日本だ。親切な日本だ。

日本人にプレゼントをあげたら、その次に会ったとき、「先日のプレゼント、どうもありがとうございました。」という話をよく聞かされる。礼儀正しい日本人。しかし、感謝のことを繰り返して、または単なる感謝のために返礼の進物をあげることは、いつのまにか最初にプレゼントをあげたときの気持ちを変えてしまつて、物々交換になってしまう。面倒くさい日本!

言うまでもなく、まじめな日本。通勤電車、バスはその雰囲気満ちている。しかし、夜遅い時間の電車は酒臭い、飲んべえ日本。

日本でアルバイトしてから、日本の店にも自分の理解がある。仕事中心もきちんと洋服を着て、ネクタイをつけて、几帳面な日本人。だが、職場を出ると、人が変わる。居酒屋に座つて、何杯も何杯もビールを飲みながら、大声で騒いでいる。うるさい日本だ。しかし、それも別の角度から見れば、ストレスがたまりすぎる日本。だから、非難すべきほどではない、退社後の飲み会は、彼らのストレスの解消法になっている。

外国に住んでいれば、どこの国であろうと、「おもしろい」発見があると思う。同じアジア人として、たくさん文化と習慣の違いを感じるところがあり、不思議に感じることもある。半年ぐらい日本で暮らし、生活には慣れたが、毎日思いがけない出来事が起こり、相変わらず日本は「おもしろい」と感じている。今後もきっと日本の「おもしろい」ところをもっと発見できるだろう。

これからの留学生生活を、もっと大切にしたいと思う。

「異なる文化」を受け入れる勇氣

張 意均

(台湾。同志社大学・男・二十一歳)



現在の私は住み慣れた場所から離れて、言語や文化の異なる国、日本に移り住んでもうちょうど二年半です。いろんな人と出会って、楽しく話してきました。でもまだ「いい関係」にはなっていないかもしれません。それは難しく、これからの努力次第です。

例えば、日本人は「はい、いいえ」をはっきり言わないのでわかりにくいと言われていました。もっとはっきり言うべきだと言う意見に私は反対します。なぜなら、こういう言い方も日本のひとつの文化だと思っからです。日本人にとってあまり他人を傷つけない方がいい、はっきり「いいえ」と言うと、この人に拒否されたんじゃないかなと思われることもあります。

多くの日本人は、仮にその意見に反対であっても、「なるほど、あなたがそう考えるのはよくわかります。でも、私だったら、それをさらにこうすると思います」とか、「悪くないですね。でもさらにこのようにできたら、もっとよくなると思う」というような言い方で、相手の立場を尊重した言い方をします。これに関しては、私は外国人の立場から聞いても、全然わかりにくくないと思います。何故かと言うと、私自身の人に対する話し方も控えめだと言われているからです。初めて日本の方と話した時も私はそのような言い方に慣れていたので、大体その「言葉の意味」の裏までわかって、特に違和感を持ちませんでした。

でも、たまにこういう曖昧な答え方で返事されると、少し不満に思う事もあります。たとえば、わたしが日本人の人に「一緒に買い物に行きませんか」と誘ったとき、相手があまり行きたくなさそうな顔をしているのに、「忙しいから」とか「その日は勉強したい」などと断られると、なぜはっきり「行きたくない」と言ってくれないのかと残念に思います。もし私の場合だったら、言い訳を探さずに、「あまり行きたくありません」と直接相手に伝えると思います。そうしたほうが、相手に自分がしたこと、したくないことがはっきり伝わるのでいいと思います。もし言い訳ばかりしていたら、相手は本当の自分の気持ちかわからないと思います。

日本人ははっきりNOと言わないかもしれないけど、ポーカーフェイスが得意な国民ではないと思います。言葉にはしなくても、表情や態度に感情が現れることが多いから、これを見破る力が必要になってきます。日本人も外国人も互いをよく観察して、理解しようとするのが大切なのだと思います。

私たちはこの「文化」を改めるのではなくて、自分からこの「文化」を受け入れた方が正しいのではないか、そして自分から行くという勇氣が大事だと思います。もし言葉を間違ったら、次の機会で直せばいいんです。いろんな失敗をすれば、自分の成長になるだけではなく、相手の外国人もきつとお互いが伝えたい意味を理解し合えるようになるのではないのでしょうか。



「細かいことに配慮する」日本人

廖 韋娜

(中国。九州大学大学院・女・二十三歳)

世界地図を広げてみると、日本という国のイメージはまず「小さい」ということだ。とりわけ近隣の中国やモンゴル、さらにロシアと比べると、その印象が強い。

この「小さい」国に初めて来たのは二〇一五年九月二十五日だった。

初めての出国なので、不安な気持ちを抱きながら福岡に着いたが、出迎えから荷物の運送、寮行きのバス、新入生のサポーターに至るまで、新入生に対するサービスがすべての不安を解消できるほど非常に完備している。ここでいう「完備」という言葉は、「細かいことまで配慮している」という意味だ。

そうした日常生活だけではなく、「細かいことに配慮する」という日本人の性格が、日本の製品から学術研究まで、様々な面に体现されている。例えば、個人的に大好きな日本の文具についてみると、質はもちろん、良い使い心地や利便さなど、消費者の立場から、「細かい」ところまで文具の可能性を探究している。その結果、日本の文具における種類や機能の多様性という優位性が生まれることになる。「細かい」ところまで探究するという日本人の精神が今、中国のマスコミの評論の中でもよく登場している。

ほかに、近年、ノーベル賞受賞者には日本人の姿が段々と増えている。学術研究の面においても、やはりその「細かい精神」によるところが大きいのだろう。

また、日本文学に目を移してみると、日本近代文学の特徴は、やはり〈私小説〉を見逃せない。

なかでも、田山花袋の『蒲団』や太宰治の『人間失格』のように、作者が自分の主観的真相を告白しているものが特に多い。時代や社会の暗黒を批判する社会小説より、心の深いとこに隠されている人間の感情や心理を探究する「私小説」がやはり日本文学の特徴を代表している。つまり、日本人における「繊細さ」、或いは、「細かい精神」が体现されている。日本文学はある意味で「繊細な文学」と呼ぶことができると思う。

世界地図における「小さいこと」から、日常生活や日本の製品及び学術研究、さらに日本文学に、至るまで、「細かさ」が見える。その「細かさ」の背後における精神も、この国と国民の性格を投影している。日本は、いろいろな面で、さらに頑張っていくことだろう。



「書道」から「母語」の大切さを知る

カパロワ・アルトウナイ

(キルギス。社会人・女・二十二歳)

キルギスは、一九二二年から一九九一年までソビエト社会主義共和国連邦十五ヶ国のうちのひとつでした。その頃、キルギスではロシア語がわからなければ入学も就職も難しかったため、ほとんどの人はロシア語を勉強しました。その後、キルギスはソ連から独立して二十六年経ち、国民のほとんどがロシア語とキルギス語の二つの言語を話すことができます。しかし、首都のビシュケクでは、ほとんどの人がロシア語しか話しません。お店にはロシア語のメニューしかありません。また残念ながら、キルギス人なのに、キルギス語がわからない人もいます。私もロシア語の学校で勉強してきたので、キルギス語よりもロシア語が得意ですが、地方に住んでいるので、生活の中ではキルギス語を使います。

けれども、ビシュケクでは生活の中で、ほとんどロシア語を使うため、キルギス語を覚えなくなってしまうました。これはとても悲しいことです。

日本文化に興味を持つようになってから、「母語」についてよく考えるようになりました。私は日本のすべての文化が好きですが、一番好きな文化は「書道」です。

「書道」の作品はとても美しく、文字を書く事が文化になっているところがとても良いです。また、「書道」を通して昔の言葉や昔の人の考えを学び、今の時代の人に伝えることができます。これは日本人として国民性を守ることができ、とてもすばらしいと思います。

キルギスには、このような文化はありませんが、先祖から受け継いできた文化がたくさんあります。

マナスというキルギスのヒーローについて語る文化があります。ロシア語しか知らないキルギス人はマナスの話伝えることは出来ません。直訳できない言葉がたくさんあるからです。また、それをロシア語で話したら、キルギスの文化ではなくなります。

日本の「書道」のように、文化は言語とつながっているとわかりました。また、文化を学んで未来に伝えていくためには、必ず「母語」が必要と思いました。日本人は昔からずっと日本語だけで生活してきたため、たくさん文化が守られたと思います。日本文化を学んで、「母語」の大切さを知ることが出来ました。私たちも、日本と同じように文化を伝えていくために、これからもっと母語を大切にしていきたいです。「母語」を大切にすることで、キルギス人の国民性を守ることができると思います。

【努力賞】—海外の社会人

「子供の自立」を重視する国

グエン・タオ・グエン

(ベトナム。社会人・女・二十六歳)



私はママになってから日本人の子育て方法を勉強し始めた。日系企業に勤めた私は日本人の独立性が魅力的だったからだ。子供の時にしっかり教育されているに違いない、と考えた。まず考えたのが、なぜベトナムより日本の子供たちが早いうちに自立性を持っているのかということだった。両国の子供達の「食事」を比較してみることに気付いた。

ある日、日本人の同僚の家族と一緒に食事したことがある。四歳の女の子が箸を使いこなし、ママに全く迷惑をかけずに好きな食べ物を自分で取って食べていた。日本ではこれが当たり前だと言われるが、ベトナムでは、子供の食事は親との戦争場みたいになる。離乳食から四歳ぐらいまで、ママはスプーンで食べ物を口に入れて強制的に食べさせなければならぬ。毎日、食べながら泣いている子供が多い。その違いの原因を探り出すと、日本人は食べる量だけではなく、栄養のバランスも注意するようだ。そして強制的に食べさせることはせず、子供に食事の大切さと楽しむことを教えて、自然に子供が美味しく食べるようにしているのだ。

日本の子供が自力で食事を済ませるだけではなく、自分で服を着て、靴を履くのもできるようだ。最も驚いたのは、小学生が一人で電車で通学することだった。日本の治安が安全だという話は聞いていたが、子供の自立性を改めて知って感激を受けた。

最近、インタネット上の動画で小学校の給食時間を見た。昼ごはん時間に、当日の担当チームの児童達が台所までクラスメート四十人分の食べ物を取りに行った。重いのお互いに協力して教室まで運んでいた。残りの子は自分の食器を机の上に準備し、「ありがとう！」と一斉に言った後、みんなで楽しく一緒に食べていた。食事後、自分たちで片付けていた。リサイクルするためにミルクパックを洗って干していた。子供たちの姿を見て、チームワークと自立性の素晴らしさがよく実感できた。

これに対して、ベトナムでは先生たちが給食を一人ずつに配り、食事後は、後片付けをする大人がいるので、子供たちは何もやらない。

子供が自立できるようにには、家庭だけでなく学校での日常の教育が大事だと気がついた。子供が自立するために日常のことからしっかり教育されているのは基本中の基本だと思う。

日本の子育て教育をこれからもっと学習して我が子に教えていきたい。そして、ベトナムの多くの母親に、日本の子育て教育をもっと伝えたい。

苦しくも、楽しい「日本語の勉強」

E・チヨローンチメグ

(モンゴル。社会人・女・二十六歳)



「日本」というテーマで考えてみると、大学に入学した時のことが頭に浮かんできます。大きな希望を胸に抱いて、モンゴル国立科学技術大学（言語学部日本語学科）へ行った時、地方出身の私には驚くことばかりでした。キャンパス内が広く、教室も多く、人が大勢いたので迷うこともありました。日本語の勉強も発音や漢字の書き順、日本語を聞き取ることも大変でした。しかし、苦しくても何より一番楽しかったのも日本語の勉強でした。

なぜ私が日本語を学び始めたかと言うと、大学での専門はエンジニアで、日本は技術が高い国だというイメージがあったからです。その時から私は「日本」という島国と密接に結びつきができたのです。大学時代に、在モンゴル日本大使館などの招待で、遂に私は大好きな日本へ二週間行くことができました。実際に行つて見ると、想像していたよりも、もっと素晴らしかったです。日本人の優しくて親切なところが気に入りました。駅で迷った時、道が分からない時、ものを無くした時、いつも助けてくれたからです。

日本とモンゴルの架け橋はやはり相撲だと思います。モンゴルでは日本の伝統的なスポーツである相撲がとても人気です。朝青龍、日馬富士、白鵬などのモンゴル人力士が活躍したので、モンゴル人はテレビでよく見えています。また、モンゴルでは、日本製の自動車がいっぱい走っています。例えば、TOYOTA、NISSAN、MAZDA、MITSUBISHIです。SHARP、CANON、TOSHIBAなど日本の電化製品も全国で広く使われています。

日本は、第二次世界大戦の後、オリンピック（1964年東京）が行われる程飛躍的に発展し、高度経済成長を遂げた優れた国です。さらに、東日本大震災では、被災者が慌てないで、一本の水を分けてお互いに助け合っている様子をテレビで見ました。強い民族である日本人を誇りに思うようになりました。

最近、モンゴルでは日本語を勉強する子供たちが増えてきて、「日本」へ留学するために頑張る学生たちも多くいます。私は子供たちに日本語を教えたいと思っています。日本語の学習人数が増えて嬉しく思います。国際交流研究所が世界へ公開した【デジタル版・日本語教材】を読んで、「早口言葉」や「回文」が面白くて気に入りました。日本語を学びながら、「日本」のことについて詳しく学べるこの教材を通じて、自分の知識をほかの人々に伝えて、日本と母国の友好関係をもっと広げていきたいと思っています。



違う「話し方文化」の理解を

サラ・ラティファ

(インドネシア。社会人・女・二十八歳)

私は二〇一一年七月、国際交流基金のプログラムで、一カ月、日本の大阪で生活したことがあるが、交通が便利で、道がきれいで、電車やバスが時間通りに運行し、人は規律をきちんと守って、日本は素晴らしくて、「さすが日本だ!」と思った。

私は子供のころから日本製のものを使い、日本は先進国というイメージで、全てにおいてすごいと思っていた。しかし、日本のことを知れば知るほど、よいところだけではなく、よくないところもみえてきた。

日本人は、「仕事は趣味だ」という人が多くて、働きすぎだというイメージを持たれている。私は日本人が時間を守り、仕事に対して責任を持つことに感心しているが、「二十四時間、働ける」という日本人が多いことについて、私は不思議に思っている。私を含めた海外の人からみれば、「日本人は仕事以外の人生の楽しみ方を知らないのではないか」と思ってしまう。

コツコツ仕事をしているように見えているが、実は会議や無意味な残業が多すぎて、仕事の効率が悪いのではないかと私は時々思う。細かいことに気にしすぎる人が多くて、一歩踏み出す勇気がないために前に進めない人がいるのではないかと。結局、他の国の企業に敗退する問題に繋がるのではないかと、と思う。効率よく仕事することも大事だが、人生のバランスを考えることも必要だと思う。

それから、日本人は自分の意見をはっきり言うことはタブーという考え方があり、曖昧な表現しかしないから、日本人とビジネスの交渉するときに、困る外国人も少なくない。日本人は、「・・・ですが」、「それはいい(要らない)」、「・・・ではないでしょうか」、「それはちよつと・・・」と、疑問形で終わらせる表現が多い。「イエス」か「ノー」が曖昧であり、誤解を起こす一つの要因になっていると思う。海外の日本語学習者が日本企業で働こうと思うとき、このような日本の会話マナーを勉強しないといけないのはちよつと困る。

疑問形の話し方で話すインドネシア人は少ない。逆に、そのような話し方は批判されることがある。こうした「話し方」の文化ギャップがあるために、日本人とインドネシア人が一緒に仕事する時、意見の対立や誤解が起る場合が多い。これからは、日本人も、外国人も、一緒に仕事をする機会が増えるのだから、誤解が起きないように、お互いに「話し方文化」の違いを学び、理解し合うことが大切ではないか。

【努力賞】— 社会人（日本在住）

日本について「思う」と「三〇

ライ・シャラド

（ネパール。日本在住の社会人・男・三十歳）



一つは、日本は約束と時間を守る国だということである。私が日本に来て一番驚いたことだ。何事も時間が決められていて、ちゃんとその時間に物事が行われる。電車もバスも決められた時間に来る。日本で仕事をしていて、約束事があると必ずその通りに物事が進む。日本人は小学生の時に五分前に行動することを習うと聞いた時はとても驚いた。私の国であるネパールではツアーなどを組むと三十分は必ず遅れてスタートする。明日といったら、明日になつたりする。三十分後に行くと言ったら、一時間後とかになる。しかし、日本ではそんなことにはならない。私は日本人の言葉と行動には差がない、と私は感じている。

二つは、一人一人の命を大切にしている国であるということだ。現在、私の母国であるネパールでは一日に五人の死体が帰国する。これは出稼で中東とマレーシアにいった人たちが過労のために亡くなってしまふからだ。だが、私たちの国ではこれが当たり前となっているため大きく報道されない。五人の人が死ぬことは日本では大きな出来事であり、とても悲しいことであると報道される。日本では人間だけではなく、様々な命を大切にしていると感じる。「いただきます」という言葉や、ペットを家族として扱っているところからもそう感じている。私は自国で命の大切さを広め、国を変えるために、自国で学校を作る活動をしている。子供たちの未来を輝くものにするために。

最後に約三十年前から若者が減り、愛国心や新たなことに挑戦するといったことが少ない国だと感じる。今まで国を作り上げてきた人たちは現状維持に徹していて、若者には負担が大きい上に、政治に関心がなすすぎると感じる。日本の若い人たちに政治のことを聞いてもあまり答えられない。これから自分たちが作っていく日本にもっと関心を持った方がいいと思う。年寄りの人も世界が変わってきたことをもっと知るべきだ。海外に行くということは日本を知ることになると思う。私自身も日本に来て初めてネパールという自分の国を知った。日本人の若者にも是非自分の国の良さを知ってもらいたい。そして、日本を好きになって愛国心を持ってもらいたいと思う。



「最高に憧れる国」

マタス・シユカーヌリス

(リトアニア。ヨナス・バサナビチユス高校・男・十七歳)

二年前、気まぐれで日本語を、趣味として勉強し始めて以来、日本に関するすべての事が面白い、と思います。今は、週に一回、日本人の先生に教えてもらい、よくインターネットで勉強しています。ですから、日本についてもっと詳しくなってきました。文化や料理の事から、販売機やトイレの事まで、日本の事は他の世界と違っていて、何も興味を持たないのとは不可能なことです。

「日本」という国を前から知っていたのは、日本の文化や科学技術が世界に目立っていて、大きな影響を与えているからです。それに、子供の私にとって、侍と忍者がいるこの遠くの国が気に入らない訳がありませんでした。ほかに、多くの人と同じように、ゲームやアニメのような大衆文化を通じて日本を知りました。ポケモンと少年ジャンプのアニメと共に成長して、今は普通のアニメやゲームのファンになりました。それに友達とは色々な漫画と音楽を教えてくださいるので、もう一生涯の娯楽を得られたような気がして、日本に凄く感謝しています。それだけで、もう日本は「最高に憧れる国」だと思います。

そして、最近、日本についての興味が増えました。日本料理は凄く特殊だし、科学技術は羨ましいし、桜の花の雨に囲まれている神社も、ネオンで光る狭くて物で溢れている都会の道など、その情景が大好きだ。日本は一番美しい国だと思います。

芸術には全く詳しくありませんが、絵や建築などの日本の芸術の方が西洋の物よりもっと面白く見えると思います。最近、日本の古典芸術や古典文学などを学んで、「わび」、「さび」や、自然をうたう俳句などについて少し知ってから、以前より伝統的な芸術が気に入っています。長い歴史を持つ日本の芸術がこんなにも栄えてきたから、大衆文化がこれだけ深く創造的になったのだと思います。

日本の伝統文化と大衆文化は、それぞれに魅力があります。日本に旅行出来る可能性があったら、絶対に秋葉原などに行って、ロボットの写真を撮って、ゲームセンターやカラオケや色々な商品にお金を全部使ってしまったらと思っていました。でも今は、それに加えて日本の田舎から都会まで探検したり、どんな料理でも食べたりして、日本の新しい事をいっぱい知りたいです。



「日本のいいと思うところ」

ダニット ヴォラサラン

(タイ。アメリカン・パシフィック・インターナショナルスクール・女・十七歳)

私は、日本語を勉強して、三年になります。去年、私は家族と日本に行きました。自分の国とちがうものをたくさん見ました。たとえば、お店の人はどのようにお客さんにサービスを提供するかや、べんりなもの、そしてまちのレイアウトなど。

私が日本で店に入った時、店の人は話をしないで、みんな笑っていました。くらい顔をする人はいません。店の人は、私についてきませんでした。私はそれが大好きです。店の人が私についてくると、不安でゆっくり買い物をできません。会計の人はお客さんがものを買いまちがわないように、お客さんにかくにんします。私は日本の店の店員のサービスにかんどうしました。タイの店の店員が、日本みたいだったらいいと思いました。

日本のものはべんりです。飲み物のボトルやおかしの箱は道具を使わずに開けられます。牛乳の箱は簡単に開けられます。日本のトイレもとても便利です。色々なきの方がありません。フラッシングの音を作ったり、トイレのシートをあたたためたりできます。トイレのそばには使い方のマニュアルがあり、英語もありますから外国人でも分かります。

日本の町はきれいです。全てのたてものはきれいに建っています。神戸市みたいに海に近い町はあまり高い建物がありませんからきれいな海のけしきが見えます。海の風も感じられます。日本人は小さい所で小さい建物を作ったくさんの店やカフェを入れます。すごいと思います。電線もきれいです。タイではたくさんの高いビル建てます。

コンドミニアム、ホテルやショッピングモールを作ります。市はその考えが気に入ったらその建物の建設をゆるします。バンコクには高いたてものがいっぱいあります。ほとんど空が見えないくらいいっぱいです。空気もわるいです。ビルのデザインはバンコクの町をアンバランスにします。たとえばビルは高くない小さな建物のまん中にたつて、となりにはロケットみたいな建物があります。そこはとてもせまく見えます。さいきはバンコクからたくさんの投資家がチェンマイにきました。高いビルを建てるためです。そんなことをしたらきつとチェンマイのきれいなけしきが見えなくなります。日本人は自分の町のイメージを気にするから町のデザインやレイアウトがとてもきれいです。

日本はいいところがたくさんあります。日本人は思慮深くて勤勉な労働者だからすべてのものはきれいでべんりです。日本人にそうさせるのが何かとわたしは考えました。「持つて生まれた資質、才能」か、それとも「育った環境」なのか、まだ分かりません。

【努力賞】—海外の高校生

高い「環境保護意識」

郭 凡辰

(中国。甘泉外国語中学・女・十七歳)



ビザ条件が緩和されて以来、日本へ行く中国人の観光客が急増しています。

私の多くの親戚も、日本への観光ブームの中の一員ですが、その親戚たちに、「日本に対する印象は？」と聞いたら、ほぼ全員が「日本の街はすごくきれいです。」と答えました。

昨年、冬休みに一週間、日本へ行きました。確かに。日本の街はきれいです。それは揺ぎ無い事実で、日本の街のきれいさは世界でも有名です。それに対して今の中国にとって環境問題は現代社会で最も大きな課題の一つになっています。

ゴミを持って歩いてる人がいます。周りを見たらゴミ箱がないことに気付き、その人はゴミを勝手にどこかに捨てました。たとえゴミ箱があるところでもそのようなことは、中国ではよく見かける光景です。

しかし、多くの観光客が日本に行つてまず困ることは、不思議なことに、ゴミをどこに捨てればいいか分からないことです。街はともきれいなので勝手に捨てるのはさすがに恥ずかしいと思ってゴミ箱を探しても、日本の街にはほとんどゴミ箱がないことに気付きます。そのことを聞いた私は、たいへん興味を持ちました。なぜ、ゴミ箱がないのに、日本の街はそんなにきれいなのでしょうか。

その問題を抱えながら、私は日本人の友人に聞いてみました。「そんなこと普通だろう。」と、その友人の答えに私は愕然としました。「じゃあ、ごみはどこに捨てるの?」「そういうのはゴミ箱じゃなくて、いつも、かばんに入れて持ち帰るよ。」とその友人が答えました。ほかの友人に聞いても、答えはだいたい同じでした。それで、日本人のそのような習慣に驚き、感心しました。

そこから見えてくるのは、日本人の環境保護意識が高いことです。そして日本人は、このような意識を持ちながら、自分の行動で環境を守り続けて来ました。私たち中国人は、まだそのような意識を持っていないからこそ、環境問題は未だに改善されなままです。ですから、日本人のそういう意識や行動は、私たち中国人にとって学ぶべきことです。

私は環境を守りたいという気持ちをより多くの人に持つてもらいたいです。そして、身近なところからゴミを減らす工夫など、たとえどんなに些細な行動でも、多くの人がやれば結果は大きく変わります。その些細な行動で、私たちの世界が変わるかもしれません。

【努力賞】—海外の高校生

「新しいものを作り出す」国

袁 思懿

(中国・吉林省・長春日章学園高中・女・十七歳)



国には、それぞれの独特の文化がある。その文化は、国交が正常な時には、お互いに影響を与え合う。一つの国の文化の特徴は、言葉にはつきりと表れる。特徴がある言葉遣いは独自の文化を育てる。

日本と中国は、千年以上前から貴重な文化を有し、歴史上大いに異彩を放ち、世界の文化と歴史に大きな影響を与えた。日本と中国はずっと仲が良く、文化も似ているところが多くある。近現代で交流が強まるにしたがって、日本と中国の言語にも大量の外来語が現れた。

現在、世界では中国だけでなく、日本や韓国、シンガポールなどでも漢字が使われている。また古代は朝鮮やベトナム、琉球も漢字を使っていた。これは、かなり昔から国交が盛んだったことを証明している。

中国は自分の文化を輸出すると同時に他の国の優秀な文化を取り入れてきた。このように、それぞれの国が他国に対して自国を開放し、交流する機会がなければ、中国の文化と東アジアの文化は豊かにはならなかった。中国に多大な影響を与えた国は、古代はインド、近代では日本だ。

近代の日本が中国に与えた影響は「言葉」からも知ることができる。日本の中国に対する影響は多岐にわたる。一番重要なことは中国が日本と交流したことをきっかけに欧米文化を知り始めたことだ。そして、欧米諸国と交流する過程で、日本人は中国から来た言葉を使ってすべてを表現することが難しくと感じた。そこで、日本の学者たちはそれまで使われていた漢字を利用してたくさん新しい言葉を改めて創造した。その後、これらの言葉は中国の留学生によって、中国に取り入れられ、新しい活路を見出した。

「不動産」「処女作」「標本」「博士」「伝染病」など、日本から来た言葉は色々あるが、これらは現在の中国人が使用する頻度の高い言葉だ。我々はこれらの言葉を通じて、言葉の後ろにある深い社会背景と日本人の知恵を知ることができた。

日本は学ぶことが上手であり、勇敢に挑戦して大胆に新しいものをつくり出す国だと思う。現在の日本の国際感覚や地位もこの特性の賜物だと思う。明治維新も、現在の外来語を取り入れることも同じだ。そういう日本を私は尊敬する。



行ってみたい「神様の国」

ドミニク・ゲジェレツキ

（ポーランド。ワルシャワ日本語学校・男・十九歳）

ポーランドには日本に興味を持っている人がたくさんいます。その人たちは、特にマンガやアニメ、日本の映画などのポップカルチャーに興味を持っています。

私ももちろんアニメなどが大好きです。若者はよく自分の国の文化に興味がありません、外国の本や映画の世界に逃げます。私が考えついた理由は、ポーランド人は日本のような遠い国に興味があるのかもしれないということです。世界の反対側の国の文化、例えば日本のアニメなどは私たちにとって新世界だと思います。

しかし、アニメは日本の文化の一部にしかすぎません。アニメ以外にも日本文化は面白いことがたくさんあります。だから、日本への関心が、アニメへの興味だけで終わってしまつては残念だと思います。

日本人はよく私に、「どうして日本や日本語に興味があるの？」と聞きます。

「どうして日本が好きなの？」と聞かれると、私は「日本の神話が好きだから。例えば、天照大御神や「スサノオ」の話は面白いから」とよく答えます。

しかし、私がそう言うと、いつもびっくりされます。そして、日本人は「天照大御神ってどんな神様？どこから来たの？」と私に聞きます。日本には日本の神様について知らない人がたくさんいるそうです。日本人が自分たちの神話についてあまり知らないことについてびっくりしました。ポーランドはキリスト教の社会ですから神様は一人しかいません。しかし日本では「八百万の神」というように、たくさん神様がいます。川や海、山にも神様がいると知ったとき、私はおっ！と思って感動しました。もしかしたら、日本人は自分の出身地の神社にいる神様のことだけを知っているのかもしれない。

私には夢があります。私が一番好きな神様は「スサノオ」ですから、いつか出雲大社に行ってみたいです。だけど、やっぱり一番行きたい場所は伊勢神宮です。私が知らない神様についてももっと勉強したいです。そしていつか日本語で古事記を読んでみたいです。

【努力賞】—日本語学校生（海外）



日本の「好きなところ」・「嫌いな所」

ワット・ソムナン

（カンボジア。国際日本文化学園一二三日本語教室・男・十七歳）

カンボジアと比べたら、日本は凄く良い国です。日本人は真面目だし、考え方も良いし厳しいです。昨年十一月「交流会の招待」で一週間、大阪と京都へ行ったことがあります。色々な日本の料理を食べました。とても美味しかったです。今も日本料理が恋しいなと思います。

日本人は殆ど暇な人がいません。年を取って、仕事を辞めても、貯金のお金で生活が出来て、凄く良いと思います。私の国のお年よりは子供に世話をして貰います。日本の習慣は良いと思います。毎朝会社へ行く前に、朝食をとりながら新聞を読んでいます。日本には高い建物が一杯あって、新幹線や電車などがあって、それに交通法規は凄く厳しいです。

日本でびっくりした事が三つあります。まず、「ごみ」を分けて捨てる事は凄く素敵だと思います。それに色々なごみからリサイクルされた製品が出来ます。食品用の中仕切りや文具や、自動車部品などです。特に、焼却炉で出る煙は国民の健康に有害はないようです。二つ目は、可愛い子が一杯いた事です。その女子高生のスカートが本当に短いです。ご両親は怒らないのかなと思いました。自転車に乗っている時や、風が強い時にスカートが腰あたりまで捲れていました。

三つ目は、目が不自由な人のための点字ブロックと歩行者信号機です。信号を渡っている間、「カッコー」という音が聞こえました。「先生、あの音は何ですか」、「盲目の方にとちが渡れるか分かるようになってるんですよ」。カンボジアはそういうものはありません。やさしい日本に住みたいなと思いました。

日本の「好きじゃないところ」は自然災害です。台風、大雨、地震、火山噴火などのニュースを見ました。台風が来たら、電気がストップする可能性があります。大雨の時には、山が崩れたり、道が川のようになったり、マンホールから水が溢れたり、地下街に水が入ってきたりします。色々な災害の危険があります。日本人は自然災害が起こった時、どんな気持ちでしょうか。私はもちろん怖いです。それでも、私のように留学したがついてくる人は一杯います。日本は、自然災害があっても、技術など外国に負けません。いろいろ良いことがある国だと思います。

【努力賞】—日本語学校生（日本在住）

「人を笑わせる」文化



ガロ・ペレス・アルトゥロ

（スペイン。渋谷外語学院・男・二十六歳）

「日本のいいところは何か？」と聞かれたらいろいろ答えることができます。豊かな文化とか、食べ物が美味しいとか、見る価値のある場所がたくさんあるとか、だれでも、すぐに答えられると思います。でも、「具体的に一番好きなのは何か？」と聞かれると「日本人のユーモア」です。

私は七年前から日本の「笑いバラエティーの番組」を見ていて、今でもとても面白いと思います。日本に「人を笑わせる文化」があるのを知りました。見ているうちにハマってしまいました。そんなテレビ番組を見れば見るほど「日本人は、すごく面白いなあ。日本と日本人のこともっともっと知りたいな」と思いました。

色々な番組を見て日本語だけではなく、日本の文化やいいところも悪いところも、いろんなことが勉強になってとても嬉しく思いますこのことで、スペインと日本のテレビ番組を比べると、「笑い」については、スペインはまだまだだな、と思います。スペイン人はとても明るいし、冗談を言うのも、大げさに言うのも好きです。なのに、スペインのテレビ番組は、日本のような面白い「笑いバラエティー」の番組が放送されません。「スペインは、何で面白いテレビ番組をやらないんだろう？」と疑問に思っています。

スペイン人は、日本人のように「わざとボケたり、突っ込まれる」ということを知らないのです。スペイン人の友達と楽しく話してる時、「日本人とちよつと違うんだな」と思うことが多いです。

日本は、「働きの者がたくさんいる」中で、「人生を楽しんでる人が少ない」と思われています。その日本の「お笑いの文化」がいろいろあってもものすごく面白いです。オープンでフレンドリー、情熱の国だと言われているスペインには、テレビのお笑い文化がないのは残念です。日本のそういう「お笑い文化」をスペインも取り入れたらいいと思います。

「お笑い」の番組を見るスペイン人は、最初は、「日本人ってやつ、変だよな」とか、「日本人は、ばかなことしかできないんだ」とか、「自分たちがやってること面白いと思ってるの？」という感想を持ちますが、慣れてきたら、とても楽しくていい文化だと思います。スペインのテレビ番組に「お笑い」があれば、もっと面白くなって、スペイン人が日本人と同じように「わざとボケたり、突っ込まれたりしたら」、楽しくなると思います。

【努力賞】—日本語学校生（日本在住）

水道水を飲まないのは「もったいない！」



ガルダ・アルジャミウス・シヨヒ

（インドネシア。東京国際交流学院・男・二十六歳）

私は、都内の公園で、日本のおじさんとこんな会話をした。

私「この水道の水、飲めますか」—日本人「大丈夫だよ」。「本当ですか。私の国、インドネシアでは飲めないから、ちよつと心配なんです」—「そうなの？日本では安全だよ」。「おじさんも家の水道水飲みますか」—「うん、でも買ったの、よく飲むよ」。「なぜですか。もったいないじゃないですか」—「確かにね。でも水というと、水道水よりやっぱ買った水の方がもっとおいしいね」。

日本は伝統的な文化と現代的な文化が手をつないで歩いているような国だと、私は思う。だが、「もったいない」ものもたくさんある。一番気になったのは日本の水道水だ。

日本の人々は水を買わず、水道水を飲む。公園にも水があるから、便利だ。

しかし、外国人以外で、公園で水道水を飲んでいる日本人を見たことがない。不思議だ。皆は手や足を洗うだけで、飲む水は買って飲んでいようだ。

また、ある時こんな体験もした。私はお金を持たずに自転車で散歩に行った。疲れたので、公園の水を飲もうと思った。日本人は水道水を飲まないから、公園の水を飲むのが恥ずかしくなった。のどが乾いて、我慢できないので、うがいをするふりをして、水をやつと飲んだ。ホツとした。

ところで、水道水は本当に飲めるのか？飲めるとしたら、なぜペットボトルの水が大量に売られているのか？日本の友達の多くは、水道水よりペットボトルの方がおいしく、体に良いと答えた。インドネシアに在住の日本人によると、日本で水を買って飲む人が増えたのは、約二十年前からだという。水を買りたい会社の宣伝で、ペットボトルの水を買う購買意欲が出てきたのだ。

しかし、インドネシア人の私は、「ぜいたくだ！もったいない！」と感じる。母国では、水道水がそのまま飲めない。そのためペットボトルの水をよく買う。一家族、三日で、約二〇リットルの水を使う。いつか、インドネシアでも水道水がそのまま飲めるようになったら、と願っている。

私は「日本は何でもあるから、便利だ」と思う。でも、水以外にも、たくさん食べ物捨てたり、無駄使いしているような気がする。「地球に優しくないので、日本人はどうして平気なんだろう」と、来日して、約一年が過ぎようとしている今、つくづく考えている。

【努力賞】—海外の小学生



「すてきなぶんかをもっている国」

ボガド・クラウディア

(パラグアイ。小学六年生〈日本パラグアイ学院〉・女・十一歳)

わたしは、まだ日本へ行ったことはありません。日本にはゆうえんちや、きれいなこうえんが、たくさんあると インターネットのページで 読みました。わたしは、そのようなきれいなこうえんで、たくさんしゃしんを、とりたいです。そして日本は、テクノロジーなどが、とてもすんでいます。わたしの国パラグアイは、まだ、日本みたいなテクノロジーは、すくなくいです。

日本とパラグアイは、とてもちがいます。たとえば、日本のみちには、かんばんやイルミネーションがたくさんあります。テレビで見たとき、とてもびっくりしました。そして、もう一つびっくりしたことがあります。それは、よるおそくまで、みちに人が、たくさんいることです。

パラグアイと日本には、にていることも、あります。一つは、パラグアイの、ラパチョという木です。ラパチョは、日本のさくらに、にているという人がいます。わたしは、さくらを、しゃしんで、みました。ラパチョに、にていると、おもいました。だから、日本へ行って、さくらを、みてみたいと、おもっています。

そしてもう一つ、にていることが、あります。それは、人です。パラグアイ人は、みんなとても、いい人たちです。なぜなら、いつもこまっている人たちを、たすけてあげるからです。みんな、いろいろなほうほうで、力をあわせます。そして、わたしのしっている、日本人の先生たちも、とてもやさしくて、いい人たちです。だから、わたしは、日本人も、パラグアイ人も、とてもしんせつで、こまっている人を、たすけてあげる人たちだと、おもいます。

日本は、とてもすてきなぶんかをもっている国だと、おもいます。だから、日本語のべんきょうを、はじめました。今もまい日、学校で日本語を、べんきょうしています。日本ぶんかの時間では、書こうをしています。

日本には、まだまだたくさん、わたしのしらないことが、あります。だから日本へ行って、もっとべんきょうして、パラグアイの人に、日本のいいところを、おしえたいと、おもっています。

【努力賞】—海外の小学生



「僕とガンダム」

キム・ジホ

(韓国) 小学六年生・男・十一歳

僕は、「ガンダム」が大好きです。

二年前、きんじよのスーパーでガンダムのプラモデル(ガンプラ)を見ました。シャープに見えてかつこいいます。あの日から僕はガンダムにハマりました。

ガンプラは、ぶひんが多くてくみたてることがむずかしいと思いましたが、くみたてやすかったです。くみたてることがわからない時は、せつめいしよを見ますが、日本語がわからないので、はやく作ることでできません。そんな時は、少しイライラします。だから、日本語のべんきようをはじめました。

一しゅう間に二回ならいに行つて、毎日しゆくだいが出ます。ひらがなカタカナは よめるようになりましたが、ガンプラのせつめいしよには かんじが多くて、まだよめません。

僕が、ガンプラをたくさん買い過ぎるので、りようしんは「ガンダム買うの、もうやめない?」と言いますが、僕は、やめることができません。この二年間で五十個作りました。

うれしいことに、今年かぞくでガンダムがある東京に行くことにしました。お台場にある十八mのガンダムを見て、ガンダムフロントでたくさんガンプラのげんていばんも見られると思うとドキドキしました。

この日から、ぼくは 東京に行くためのじゆんびをはじめました。ガンダムのじようほうをたくさんしらべたり、りよこうのための日本語のべんきようもはじめました。日本語の先生にはひみつですが、行きたくない日、やりたくない日もあります。ガンダムフロントに行つてたくさんガンダムを見れると思うとがんばることができました。

いつものようにガンダムのじようほうをしらべていました。そしたら「ガンダムフロントがなくなる」というじようほうがありました。「うそでしょー!!」あんなにじゆんびしていたのに。がっかりでした。

ざんねんですが、東京りよこうはなくなってしまいました。

僕といえば、ガンプラを見たり、日本語をべんきようしたり、ガンダムのじようほうをしらべたり、いつも通りいます。

ガンダムを知つたから、東京りよこうのけいかくもあつたし、日本語のべんきようもしているし、こうして、日本語で作文を書く機会もできました。そして、夢も持つことができました。

僕の夢は、ガンダムを作る会社「バンダイ」にしゅうしよくして、ガンダムファンたちがほしいと思うガンダムを作る事です。

二年前、ガンダムをはじめた事は、僕のせいかつに大きな変化をあたえました。